609-261
1200501533852
609
61
複写

人さま

昭和六十三年四月

609-261

題して『人さまざま』と云ふ。其の內容推して知る可し。別段鑑査もなく、試驗もなく、全く其の折々の作品を、手に任せて收拾す。其の無頓著なる所に、却て本書の特色が存する。古人の『不風流處也風流』とは、蓋し此事であろう。

* * * * *

我等は決して讀者各位に、本書の一切を讀了せんことを期待しない。如何に氣澤山の人も、滿堂の會合に際して、一切の會衆と言葉を交す者はあるまい。我等は讀者各位が、本書中より選擇して、其最も適意の題目を一瞥せんことを望む。

本書中には、著者が可成骨を折りたる文もあれば、當座の興味もて、書きなぐりたるものもある。されど蓼喰ふ蟲も好き好きと云へば、何れが讀者の好に投ず可き乎、著者は固より之を知らない。但だ寛大なる讀者各位は、著者が家鴨の卵を產し放ちにする如く、其の舊稿を全然投け遺りにするの癖を容恕し、大目に看過せられんことを祈りて已まない。

昭和六年六月初八　民友社に於て

蘇峰六十九叟

本書は全く手當り次第に、予の舊稿中より收錄した。其中には古人もあり、今人もある。西洋人もあれば、東洋人もある。一卷の書中に群集する人は、宛も停車場に群集する人の如く、個々銘々である。但だ聊か停車場に群集する衆客と趣きを殊にするは、其の相手が一人であることだ。相手とは誰ぞ、申す迄もなく著者だ。

＊　＊　＊　＊　＊

本書は決して唐太宗の凌烟閣でもなく、佛國のパンテオンでもない。只だ著者が、或る個人個人に就て、其の感想を、隨時に書き綴つたものを蒐めたものに過ぎない。然も若し本書に特殊の味ありとせば、著者自から書くことを禁ずる能はざる刹那に於て、書いたことだ。言ひ換ふれば、題

を設けて歌を詠じたるものでなく、題が自から來りて、著者を促して、歌を作らしめたのだ。其の評論の當否、叙事の巧拙の如きは、固より著者の自から知る所でない。されど一片の眞氣、中より溢れて、此の文字となりたるだけは、決して間違なしと云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

然も此れが爲めに、其の調子の時として、餘りに抑揚に過ぎ、其の文字の餘りに褒貶に失したる虞なしとしない。然も此の如き文字は、其の感興の王する際に於て、始めて生氣あるものなれば、强ひて之を理知の範型に入れて、之を整正せんとすれば、却て文章を殺すの虞れがある。されば著者は其の當否の判斷は、讀者諸君の明鑒に一任し、殆ど原文の一字一句をも訂正せずして止んだ。

＊　＊　＊　＊　＊

人を評するは容易でない、而して人を論定するは、最も難事だ。それは單に評者彼自身の標準が、時と與に異同ある如く、被評者其人も亦た、時と與に變化を免かれないからだ。古人が棺を蓋うて、論定まると云うたのは、人の一生は變化限りなきを意味したものだ。されど棺を蓋うても、論未だ定まらざる者少くない。或人は其の中年に重きを措き、或人は其の晩節に重きを措き、或人は其の表面を見、或人は其の裏面を見る。其の論定なきも、決して怪しむ可きではない。されば本書の如きも、要するに著者の一家言として見る可きものにして、決して千載不磨の斷案ではない。但だ本書中、著者同鄕の先輩横井、元田兩先生頌德碑文の如きは、其の目的が專ら頌德にあれば、著者自から尋酌する所ありたるは、云ふ迄もない。然も其の描きたる兩先生の面目は、決して眞相以上ではあるまいと信じてゐる。

大正十五年四月初六　午後四時半

東京加賀町　國民新聞社新館に於て

蘇峰學人

人さまざま　目次

第一　人物隨錄

東京の恩人……一
山縣元帥……六
山縣老公八十一歳の誕辰……四〇
新椿山莊記……四一
世外老侯……四九
大山公を弔す……六三
高島子爵……七二

大浦君の爲めに……七九
原　敬　君……九一
桂公の三周忌……九九
井上友一君を悼む……一〇二
愛山山路彌吉君……一〇六
熊谷直亮君と予……一二〇
宗演老漢……一二八
石井十次君……一三九
白露石井勇君……一四四
齋藤修一郎君……一五〇
森槐南逝く……一五三
栗原君を悼む……一五六

草野門平君を悼む……一六二
玉生武四郎君……一六八
松方侯爵夫人……一七三
後藤子爵母堂……一七七
故後藤男爵夫人……一七九
高本先生……一八二
二十年前の昔（山田武甫翁に就て）……一八八
山田翁と井上先生……一九四
井上梧陰先生……一九七
小楠横井先生頌德碑文……二〇六
東野元田先生頌德碑文……二一一
耶馬溪に於ける昔譚……二一五

徳川家康の隠れたる半面……二二〇
一絲和尚……二三六
波理須翁……二八〇
婁氏を弔す……二八四
新聞界の天才ノ卿の死を悼む……二八八
久連漫叟
一　維遜と惹兒……三〇〇
二　佛國の危機……三〇五
三　意外の開戰、意外の平和……三〇九
四　虎の本色……三一三
五　勢力の絶頂……三一八
六　年貢の納め時……三二〇
七　政界失脚……三二四
八　首相としての彼……三二九

九　大戰爭の三年間……三三二
十　軍國宰相としての彼……三三六
十一　無名の老將軍……三四〇
十二　有名の老將軍……三四五
十三　蓋棺事定……三五〇
英國の一新聞記者（マスシンガム氏の死）……三五七
新聞界に於ける冒險（英國記者ギッブスの著書）……三七二
政治家の晩節
一　アスキス氏牛津伯となる……三九六
二　無色透明の人格者……四〇〇
三　寸前暗黑……四〇二
大勢と人爲……四〇五
レニンとトロツキー……四一四
ユーゼニー皇后に就て

目次

一　那翁三世の皇后……四二五
二　小説より奇なり……四二八
三　那翁三世の卽位と結婚……四三二
四　ヴヰクトリヤとユーゼニー……四三七
五　皇子生誕……四四三
六　英佛海峽の一夜……四四五
七　阿弗利加の慘事……四五〇
八　九十五年の生涯……四五四

第二　人物隨錄

野田大塊翁

一　緒言……四六一
二　翁の經歷……四六三
三　翁の特色……四六七
四　身は國家に許す……四七三

正三位勳一等野田卯太郎君墓誌……四七五

人傑山縣公……四七六

桂公と帝國主義

一　日本と帝國主義……四八二
二　桂公の桂公たる所以……四八六
三　武力誅求主義と人道經撫主義……四八九

目次

四　穏健平和なる帝國主義……四九二
桂公記念事業の完成……四九六
大浦兼武君銅像銘……五〇二
有馬新七先生傳記及遺稿……五〇四
有馬新七先生傳記及遺稿序……五〇七
梁川星巖翁附紅蘭女史序……五一一
維新志士遺芳帖序……五一四
勤王志士遺墨集序……五一七
維新志士正氣集序……五一八
小楠詩艸跋……五二一
横井小楠先生書簡跋……五二五
元田先生進講錄序……五二九

大風流田能村竹田序……五三三
乃木序……五三六
大倉鶴彦翁序……五四〇
國木田獨歩君……五四八
島木赤彦君……五四九
巖谷小波君……五五一
無佛居士……五五三
池部鈞君……五五六
小崎弘道先生
一　緒言……五五九
二　先生と予の青年期……五六二
三　容易に信ぜず、信ずれば動かず……五六五

目次

四　牧師以外の功勞……五六七
五　先生と予の家族……五六九
六　小崎先生夫人……五七〇
七　本來面目是倉夫……五七二

第一人物隨錄

蘇峰學人

東京の恩人

徳川慶喜卿の長逝

運命の鬼に翻弄

徳川老公慶喜卿の長逝は、人をして舊新日本の聯絡の橋梁を斷絶したるかの感に打たれしむ。多くの人に於ては、慶喜卿は、業に既に歴史中の人物にして、當世の人間視せざりしならむ。乃ち公自身も亦た自から影を戢め、音を靜め、活社會と沒交渉の生活を送りたりき。其志亦た悲しむ可からざらん哉。

惟ふに天下公の如く、運命の鬼に翻弄せられたるもの多からざる可し。公は生れながらにして、既に天下仰望の目標たりき。當代の泰山北斗たる水戸景山公を父とし、やがて一橋家を繼ぎ、將軍家慶公の愛重する所となり。端なく更に公を中心として、幕府の僚吏、及び諸侯中に、繼嗣問題は湧き出で。將軍家定及び大奥の嫌忌を煽揚し、水戸對井伊の確執を見るに及び、茲に公及び其の擁

舞臺一轉と其晩節

載者の一大頓挫を來せり。

斯くて舞臺一轉、將軍家後見職となり、而して將軍となり、而して大政返上となり、而して朝敵の名を得、而して其の晩節を韜晦の中に全うして逝けり。

公に失望したるは味方

惟ふに公に最も失望したるは、公の敵にあらずして、其の味方たりしならむ。而して公の自から迷惑したるも、恐らくは其の敵にあらずして、其の味方たりしならむも、未だ知る可からず。蓋し多くの味方は、公を理想化して、公に望む可からざるものを以て、公に望みたりき。而して少しく其の意の如くならざるや、乍ち群起して、公を咎めたりき。但だ公が勤王の一事に於ては、義公以來の家風を把持し、造次、顚沛、未だ曾て其の心を二三にせず。是れ公の晩節が、自から韜晦しつゝも、却て西山に沒する夕陽の、金色燦爛たるが如かりし所以ならむ。是れ先帝陛下が、特に德川宗家以外に、公をして別に家を興さしめ、之に賜ふに無上の榮爵を以てし給ひし所以ならむ。

公と勤王の一事

東京市の哀悼決議

我が東京市は、公の薨去に關し、哀悼の決議をなして曰く、

七百年來武門に移りたる政權を奉還し、平和の間に江戸城を開き、維新の洪業をして容易ならしめ、都下の繁榮をして持續するを得せしめ、以て我が東京市今日の興隆を見るに至る、一に公の賜なり

と。吾人も東京市が忘恩ならざるに滿足し、毫も違言なき也。但だ若し東京市の恩人として、慶喜公を頌揚する場合に於ては、茲に一人の想起せざる可からざる人物なからず。若し此の人を無視して、慶喜公のみを擧げん乎、恐らくは公の本意にあらざる可し。

無視の出來ぬ一人

勝海舟

そは云ふ迄もなく勝海舟也。當時旗本八萬騎と稱する中に於て、眞に定見あり、且つ其の事に當り得る者、恐らくは一方に小栗上野介と、他方に勝安房守とを尤とすべかりしならむ。小栗は德川氏の見地より、主戰論を絕叫し、勝は帝國的見地より、平和論を主唱したり。其の小栗を斥けて、勝を採用したるに於て、

東京市の恩人たる所以

慶喜公の東京市の恩人たる所以は存す。而して只だ此の一點に存す。公は恒に自から用ふるの人たりき。但だ當時に於ては、勝に託するに大事を以てしたりき。吾人は試みに海舟の手記にかゝる斷腸之記の一節を掲錄せんに。

斷腸之記の一節

我江戸城引渡の事、四月十一日を卜す。十日夕刻池上本門寺先鋒總督と談判し、直に上野大慈院に到り、其の顚末を上言す。是主公謹愼の院也。院内疊六ひらの小室なり。主公當正月已來未だ曾て安眠飽食一日もあらず。面貌枯瘦を見る。我其胸裏を思ひ、少隙を見て、顚末を述ぶ。少しく降心あらむを思ふが故なり。此の時主公我に向て仰せに曰、嗚呼危哉々々と。若此の如くならば、災害足下に生ぜむ。如何ぞ諸官に告げ、市民に觸れ、兵隊を警め、人選して、其の不虞に備へざる。汝が所置甚だ粗暴にして大膽なる。且談判其の順序を得ず、今にして又如何せむ。我が心裏を貫かずして斃れむ歟と、血涙雨の如し。我是を伺て心膽共に碎け、腰足痲痺せり。忽として悟る所あり、

慶喜公と勝海舟との對話

回答して曰、嗚呼君上の言誤てり、二月御決心の際、大事を任ずる人無く、我微力成すあらざるを以て、御受に及ばず。然るに强て命ぜられ、終に及て其時上言、今日より後大難事、或は大變に及ぶとも、決して上言御指令を用ひざるなりと。主公仰に云ふ固より然りとの言あり。今日にして言上するものは、主公の御胸裏を恐察し、默止する能はざるによるが爲めなり。府下百萬の民生死の分、今一日に臨む。今日以て恐懼の念あらむ哉と、且申且罵り、席を立て城外に向ふ。此際の愁苦誰にか告げ、誰に語らむ。

何の蛇足を添へん

至情は文を做す、記者亦た何の蛇足を添ふるの要あらんや。慶喜公と勝海舟とは、兩ながら此中に活躍するにあらずや。吾人は今日の場合に於て、東京市が慶喜公を頌して、他に及ばざるを咎めず。何となれば今日は、歷史の講究會にあらずして、慶喜公の葬儀なれば也。但だ世上瞶々者或は此の決議が、斯る場合に行はれたるを察せず、歷史的事實を抹沒し、東京市民をして亡恩の市民たら

公の志を成す

しむるの虞あるを憂ひ、竊かに爲めに一言す。蓋し是れ必らず慶喜公の志を成す所以ならむ歟。（大正二年十一月三十日）

山縣元帥

予の死後には洪水

朕が後には洪水あらんとは、路易十四世垂死の語と傳ふ。山縣元帥は、如何なる末期の句を吐きたるか、知らざるも。若し其の心事を忖度すれば、恐らくは予の死後には、洪水あらんと云うたであらう。彼は我が攝政殿下の、賢明に在すを見て、大いに意を强うしたりと云へり。併しその以外に於て、世の中は、寧ろ彼の期待と逆行した。若し彼に懊惱、煩悶あらざりしとせば、少くとも不安心はあつたに相違あるまい。忌憚なく云へば、彼は國家の前途に就いて、憂心忡々として逝いたであらう。記者は實に彼に對して、多大の同情を禁ずる能

世態は彼の期待と逆行

はぬ。

離隔的心意の觀察

山縣の眞値を測定するには、餘りに時間と、空間とが接近してゐる。彼の歴史的人物としての位置は、若干の年代を隔てゝ、遠方より之を諦視せねば、其宜ろしきを得難い。然も今日に於て、全然緘默するには、彼は餘りに偉大である。故に出來得る限りに於て、離隔的心意もて、聊か觀察を試みるであらう。

政治的生命の久遠

一言にして云へば、彼は孝明天皇の末期より、明治天皇の全期を通じ、以て大正の御代に至る六十有餘年に亙る年代に於て。實に一個人として、最も多くの干係を、日本の國家と有したる一人であつた。八十五歳にて逝きたる彼は、年齡に於ても、申分がない。奇兵隊時代に於て、彼と同功一體の高杉晉作が、二十九歳にて死したるに比較すれば、彼は殆んど三倍の年齡を占めた。然も此の長き歳時が、殆んど一日も、天下國家と接觸なきは無かつたを思へば。彼が如き政治的生命の久遠あるものは、實に比類罕なりと云はねばならぬ。

彼と伊藤博文

彼の公的生涯は、實に安政四丁巳の歳、五人の青年と與に、藩命を帶びて、京都に時勢視察に差遣せられたるに始る。其の一人は、實に彼が後年の對手たる伊藤博文であつた。時に彼は二十歳、山縣小輔と稱した。伊藤は十七歳、伊藤利輔と稱した。彼は天保九年萩に生る、家門は舊なりと稱するも、當時は全く卒伍であつた。

松陰の門に入る

當時萩藩の青年は、直接間接に、吉田松陰の感化を被らぬものは無かつた。彼は當初より他の籬下に立つを欲せず、寧ろ獨り武術を修めて、松陰の門に遊ぶを屑としなかつた。然も京都に於て、久阪玄瑞に勸誘せられ、其の紹介狀を持して、歸來遂に其の門に學んだ。但だ恐らくは安政五年戊午の一個年に過ぎなかつたであらう。均しく松陰門下と稱するも、高杉、久阪や、又た品川、野村の類とは、聊か其の類を殊にしてゐる。

彼の維新以前に於ける閱歷は、專ら奇兵隊の軍監山縣狂輔として、世に轟いてゐる。奇兵隊をして、維新回天史上に、赫々の光あらしめたのは、固より高杉晉作の天才に歸せねばなるまい。高杉は實に當代の時勢が產したる奇男兒だ。彼は天外より湧き來る奇想をば、神變不可思議の手腕もて、之を運用した。後年山縣が位人臣を極め、功勳坤輿を照らすの時に於ても、尙ほ高杉に對して、推賞、讃嘆を惜しまなかつた。然も彼はその高杉に對してさへも、決して子分ではなかつた。高杉は高杉、山縣は山縣、晉作は晉作、狂輔は狂輔。互ひに提携するも、決して我が人格を、高杉に投沒するを屑としなかつた。曾て高杉が彼に向つて、

維新以前に於ける閱歷

高杉は高杉、山縣は山縣

わしとおまへは燒山かつら
裏は切れても、根は切れぬ

との俗謠を投じたのを見れば、亦た以て彼が高杉に對して、當時既に隱然一敵國の看を與へたるを、知る可しだ。

彗星と恒星

蓋し高杉は奇才なるも、彗星であつた。彼は奇才ならざるも、恒星であつた。善謀善斷、倏忽變化、端倪す可からざる龍の如きは、高杉の本領であつた。されど首尾照應、統制あり、節度あり、爪も立たず、水も漏れず、必らず功を萬全に謀り、事を完成に期するは、一に彼の努力に俟たざるを得なかつた。彼にして高杉と與に、慶應の末期に死せん乎。尙ほ其の姓名は、後世に傳ふ可きものがある。然も彼の事業は、寧ろ此れからであつた。

政治家の素質

彼は當時に於て、既に政治家の素質があつた。彼は薩長聯合が、討幕に必須の條件であるを感得した。而して自から身を挺して、其の使命を果す可く、慶應三年五月、薩藩の伊集院金次郎、及び中村半次郎(桐野利秋)と共に京都なる薩の藩邸に入つた。

薩長聯合の促進者

薩長の聯合は、爾來彼が公生涯を一貫する信條の一となつた。而して其の薩との聯合に就ては、彼は先づ其の巨漢たる西郷南洲と握手した。薩長の聯合は、必らずしも專ら此に起因すと云ふ可きでない。然も彼の此行が、之を實現するに於て、促進の効能多かつたことは、固より疑を容れぬ。

彼と最初の洋行

若し夫れ戊辰の役に於て、彼が北越に轉戰し、其の功勳の少からざりしことは、言ふ迄もない。彼は戎衣を脫する間もなく、明治二年命を奉じて、歐洲を視察した。此れが彼の最初の洋行だ。彼が此行に於て、如何なる所得あつたかは、彼が熱心なる廢藩置縣者となり、又た熱心なる兵權統一者となつたことで、分明だ。

軍制の創立者大村

當時長藩に於て、軍事的總裁と云ふ可きは、山縣でなく、大村であつた。大村は高杉と異りたる意味に於ての、韜略家であつた。戊辰の戰役に於て、之に從事したる兵數よりすれば、薩摩であつたが、其の統制權は、西郷にあらずして、却て大村にあつた。大村は日本に於ける軍制の創立者として、記憶す可き一人だ。但だ彼は薩人と與に、之を實行するよりも、寧ろ薩人に對して、之を實行せんとする傾向があつた。大村は恐らくは天下の亂の、再び薩南より出來するを豫

期したであらう。その理由よりして、大阪を陸軍の根據地とした。然も彼は刺客の手に斃れ、而して其の位置は、幾もなく山縣の紹ぐ所となつた。

大村の蹈襲者は山田顯義

然も山縣は決して大村の蹈襲者ではなかつた。大村の衣鉢は、寧ろ山田顯義に傳へた。山田は山縣に比すれば、實戰に於て、奇拔の天才であつた。彼は智慧の塊と稱せられ、又た小奈翁と綽號せられた。されば陸軍に於ても、大村の系統に屬する者と、山縣に屬する者と、自から兩派をなした。而して別に雄大なる薩摩の勢力が、虎踞龍蟠したのは、云ふ迄もない。

山縣の苦心如何

此間に於ける山縣の苦心は、果して幾許であつたらう。彼は其の脚下たる長州人士に於て、有力なる山田の如き、反對者と云ふ能はずんば、競爭者を有した。而して大村の薫陶に浴したる陸軍の新知識は、概して山縣に謳歌せずして、寧ろ山田に謳歌した。然らざるも決して山縣の股肱、腹心ではなかつた。而して彼はそれより手剛き薩摩の大勢力を、如何に措置せんとする。彼等は動もすれば大西郷さへも、制馭に苦んだ猛獸であつた。

適當の戮協者を見出す

彼の薩長聯合の信條は、此の場合にも、實現せられた。彼は最初に大西郷の手を握つた。而して征韓論破裂後は、薩摩の軍人中に於て、最も適當なる戮協者を見出した。そは大山と西郷從道だ。山縣は如何なる場合にても、此の兩人中の一人を、其の脇役とするを忘れなかつた。大山は軍事上の脇師に限られたが、西郷に至りては、殆んど百般の政務に渉りて、脇師となつた。蓋し天下に脇師多きも、西郷從道は、天下一品であつた。

軍制完成の殊勳者

他の點に於てはいざ知らず、此の薩長聯合の力を核心として、軍制を完成したるは、全く彼の力に歸せねばなるまい。而して一切の障碍を排し、徵兵令を布き、全國皆兵の基礎を定めたるは、必らずしも山縣一人の力のみと云ふ可からざるも、若し其の殊勳者を、一個人に求めば、固より山縣を除いて、他に其人はない。彼が帝國の軍制を創制するや、先づ西周をして、普魯西軍制を飜譯せし

め。自から之を十二分に咀嚼、諒會し。而して後之を提議したと云ふ。彼が一事を爲すにも、其の豫備知識を用意し、自から不敗の地を占めて、而して後之を行ふもの、以て知る可しだ。而して彼が徵兵令の施行、六鎭臺の設置等、著々實踐したる効果は、明治十年の役に於て、始めて其の實物敎訓を天下に示した。

薩州陸軍勢力の減殺

西南の役は、彼に取りては、寧ろ仕合であつた。其の友人にして先輩たる西鄕南洲を失うたるも。徵兵令の普及を妨害する障碍は、此れが爲めに殆んど全く除却せられた。薩人の陸軍に於ける勢力は、半減せられた、否な三分の二減せられた。此の一戰後、天下復た帝國の陸軍に向つて、指を差すもの無く。帝國の陸軍に於て、山縣に向つて、指を差すもの無きに至つた。固より爾後、若干の異分子を生ぜぬではなかつた。然も三浦、鳥尾の如きは、仲間中の不平兒であつた。谷、曾我、小澤等の如きは、極めて少數者たる異分子中の不平兒であつた。

若干の異分子

事實は山縣の陸軍

固より山縣に向つて、齒の立つ可き心配は無かつた。

最早事實は陸軍の山縣と云はんよりも、山縣の陸軍となつた。そは山縣が西鄕、大山と提携し、西鄕が海軍に赴きたる後は、專ら大山を名譽の位置に立て、自から實權者として、其の元締をなしたからだ。而して彼が此の如き勢力を得たるは、決して僥倖でもなく、偶然でもなかつた。彼としては正さに斯くある可き、當然の收穫であつた。若し山縣をして、此際に逝かしむるも、彼が帝國陸軍の完成者であると云ふ名譽は、百代迄も傳ふ可きであつた。

十年役後の政治家生涯

然も彼の政治家生涯は、寧ろ明治十年役以後に於て、始つたと云はねばならぬ。彼は武に志したが、本來の武夫ではなかつた。如何に彼が文雅風流の心に、饒んでゐたかは、一片の『葉櫻日記』之を證して餘りある。此れは彼の三十歲の頃、薩と聯合の爲め、京都潛行中の作であるが、其中に詩あり、和歌あり。女素人離れのした秀逸もある。

政治家たるべく軍人

然も彼は單に文雅風流の士ではなかつた。彼はそれ以上入り組みたる、政治的機關の運用術に長じてゐた。彼は陸軍出身ではあるが、其の素質は、寧ろ政治家である。但だ軍事の修練と經驗とは、彼をして政治家たらしむる、一種の修養と見る可きであらう。乃ち彼は軍人にして、且つ政治家であると云ふよりも、政治家たる可く軍人であつたと云ふを、適當とする。彼は動もすれば軍機を政機に應用した。彼が伊藤に卓越したる所、此に在り。而して其の及ばざる所も、或は此に在りと云ひ得らるゝ。

行政大學校へ入學

彼は明治十五年一月參事院議長となつた。此れは彼としては行政大學校に入つたも同樣だ。而して明治十六年十二月內務卿となり、明治十八年十二月、內閣制の發布と共に、內務大臣となり、彼が內務行政の長官たる、前後六年有餘に及んだ。而して如何に彼が此の方面に努力したかは、姑らく其の大なるものを擧ぐれば、彼が地方自治制度を、施行した事だ。

地方自治制の施行者

今日に於て、此の地方自治制度の不都合、不適當を說く者が少くない。然も兎も角も、帝國議會開設以前、帝國憲法發布以前、市町村の自治制を制定し、之を實行するを得せしめたるは彼だ。彼が如き有力者にあらざれば、到底群疑を排して、之を行ふを得ぬ。

スタインに私淑

彼が曩きに普魯西の徵兵法を、我に適用した如く、又た自から地方制度編纂委員長となり、獨逸人モッセを聘し、起艸の任に當らしめた。惟ふに彼は或は普魯西中興の政治家、スタインに私淑する所あつた乎。彼には外國語の知識なかつた。

理想的標本の獨逸

然も彼の頭腦は、或る程度迄獨逸化した。

彼は近世の獨逸に於て、殆んど其の理想的標本を見出した。若し彼にして軍服を著せず、軍刀を帶ばざらしめば奈何。彼は丸腰になりても、優に第一流の政治家として、十二分に伊藤と抗衡するの地歩を占めたであらう。然も彼は軍服と軍刀とに身を委ね、容易に純粹の政治家たるを屑とせざるの風あつた。

第一次山縣內閣

然も時勢は奇なる運命を齎らした。帝國未曾有の第一次帝國議會は、憲法の重なる起草者、伊藤によりて開會せられず、彼によりて開會せられた。明治十四年十月、大隈を政府より追出し、同二十一年二月、再び大隈を政府に迎へ、二十二年三月、又た後藤（象次郎）を迎へたるが如き變通政策は、果して彼の心から贊同した事であつた乎、否乎、記者の知らざる所。

慎重謀慮は彼の流儀

但だ彼が黑田內閣に於ける、大隈の條約改正の騷ぎの渦中より脫するを得たのは、當時洋行中であつたからだ。然も彼は明治二十二年十月、其の騷ぎの終期に歸朝し、十二月には、第一次の山縣內閣を組織するに至つた。彼は此時に際しても、容易に起たなかつた。その爲めに、黑田內閣の後には、約二個月間、臨時に三條（實美）內閣を生ずるの止むなきに至つた。此れを慎重と云はん乎、此れを小心と云はん乎、將た老獪と云はん乎、そは見る人の如何による。但だ彼や事に臨んで慮り、前を瞻、後を顧、左視右盼、其の機愈よ熟し、其の謀全く成るの時に於て、始めて趾を擧げた。是れ只だ彼の流儀のみ。

妥協性の豐富

彼が政治家としての妥協性に豐富なるは、その第一次の內閣が、之を證して餘りある。第一次の帝國議會は豫算大節減を以て、政府に肉薄した。若し一本調子の首相たらん乎、解散は覿面であつた。然も彼や敢て首尾克くと云はざるも、無事に第一議會を經過せしめた。而して彼は之を機として、首相の職を辭した。

用意周到の政治的本能

彼の進退は必らず法があつた。彼は其の進むに於てよりも、其の退くに於て、尤も其の用意の周到を發揮した。別言すれば彼の政治的本能は、其の退一歩の際に於て、より多く、より善く、より巧に現呈せられた。如何なる場合にても、彼は刀折れ、矢盡きる迄、戰ふが如き、見苦しき討死は爲さなかつた。彼は勝算あらざれば進まず、而して尙ほ戰ふの餘力を剩まして退く。是れ山縣一家の流儀であつた。此の流儀は、彼の對象たる伊藤に向つて、殊に苦手であつた。

日清戰役に出征

二十七八年戰役は、必らずしも彼一人の力と云ふ可きでない。軍事上に於て川

上操六あり、外交上に於て陸奥宗光あり、而して當時內閣の首班たる伊藤のあるあり。その他大山、西鄕の徒、皆なそれ〴〵の分け前に預らねばならぬ。然も彼も亦た勞した。彼は第一軍の司令官として、馬革屍を裹むの覺悟にて出掛けた。其の病の爲めに滿洲より、勅命もて召還せられたるも。當時已に連戰連勝の後にて、決して我軍に損する所はなかつた。

山縣ロバノーフ協商の出來

戰後幾許もなく、彼は明治二十九年三月、命を奉じて露國尼兒拉二世の戴冠式に赴いた。此れは單に儀式一遍の用務ではなかつた。當時三國干涉の餘を承け、露國の極東に臨む脅威は、實に異常であつた。其の手は朝鮮を抱き、正さに我が領海に及ばんとした。彼は露國と協商す可く、派遣せられたのだ。

大みこと貫かでやはやみなまじ

固より老の身は捨つるとも

是れ實に彼の使命に對する決心を言明したるものだ。斯くて六月露京に赴き、山縣ロバノーフ協商は出で來つた。

樞密院議長となる

彼は第二次伊藤內閣の際には、元老總出の爲めに、司法大臣となつた。然もやがて其の次官芳川を大臣に推し、樞密院議長となつた。第二次伊藤內閣の後、松隈內閣出で來り、而して第三次伊藤內閣出で來り、政府對政黨の軋轢は、愈よ其の極に達し、遂に未曾有の政黨內閣と稱する、隈板內閣は出で來つた。

走馬燈の政局

第三次伊藤內閣は、明治卅一年一月に成立し、六月に倒れ、隈板內閣は七月に成立し、十一月に倒れた。政局は恰も走馬燈の如く變轉した。

政治的手腕の發揮

彼が政治家的手腕は、專ら此の際に發揮せられた。彼は第三次伊藤內閣の末に於て、伊藤が自から政黨を組織せんとするに反對し、御前會議に於て、大激論を伊藤と交換した。或は伊藤が大激論を、彼に仕向けたとも云ひ得らるゝ。何れにしても彼は、當局者が自から政黨の首領となるには、反對であつた。必らずしも此の異論に對する報復ではなかつたが、伊藤は特に野黨大合同の成立し

たる曉、其の兩首領大隈板垣を、後繼者に奏薦して去つた。而して其の後が、大隈黨、板垣黨の仲間喧嘩となつた。間もなく隈板內閣は崩壞した。

第二次山縣內閣

此の如くして第二次山縣內閣は、明治三十一年十一月に成立した。彼は現在の政友會の前身自由黨と提携した。此の提携の爲めに、彼は增稅案を通過せしめた。然も此の提携の爲めに、彼は肝膽相照らすの熟語の下に、頗る不廉なる代價を拂うた。然り固より彼は無代にて、或物を獲るを豫期しなかつた。此れは固より覺悟の前であつた。然も彼は鬱なき政黨員の慾望に堪得ず、寢耳に水の文官任用令を發布した。而して第十三議會、第十四議會を切り拔け、明治三十三年九月、其職を去つた。

第四次伊藤內閣と第一次桂內閣

當時伊藤は政友會を組織して、百事草創の際であつた。此時に於て內閣を押し付られたのは、伊藤に於ては滿腔の不平であつた。然も彼は餘儀なく、第四次伊藤內閣を組織した。此の內閣は曾て伊藤の與黨であり、今や山縣の與黨とも見る可き貴族院に苦しめられ、且つは內訌を生じ、遂に明治三十四年五月、其職を辭せねばならぬ破目に陷つた。斯くて第一次の桂內閣は出で來つた。而して此の內閣や、全く山縣の後見、及び指導の下に成立し、且つ成長し、生存したと云ひ得らるゝ。

三十七八年戰役當時閣外の有力者

三十七八年戰役に就ては、山縣の分け前は、二十七八年戰役に優るも、劣ることはない。彼は日英同盟の主唱者と云はざる迄も、其の有力なる味方であつた。廟議が之に決したのは、桂、小村の努力は勿論であるが、閣外の有力者として、彼の支持の功に歸せねばならぬ。而して對露政策に就ても、彼は所謂る硬派でないと同時に、決して軟派でもなく、其行く可き所に行くを豫想して、其の最後の決心を爲すに遲疑しなかつた。而して其の戰役中、老政治家としてのみでなく、老軍人として、軍務に鞅掌したのは、良とに多しとするに足るものがある。

伊藤と對

彼の政治的生涯は、第二次山縣內閣を以て、表面上其の終りを告げたかの如く

峙―元老中の第一人

ある。されど事實は寧ろ此から擴大せられたと言ひ得らるゝ。彼は元老中の巨頭として、伊藤と對峙し、至尊の最高顧問たると同時に、大小文武群僚の景仰を、一身に集め、眞に比類なき大勢力となつた。而して明治四十二年十月、伊藤の哈爾賓の難に遭ふや、爾來彼は全く元老中の第一人となり、否な殆んど唯一人たる威勢の府となつた。然も彼は謙抑自から持し、之を大びらに衒誇するを欲せず。恒に其名を避けて、其實を取つた。

正面の對手は伊藤

彼の政治的生涯を語るには、併せて其の對手たる伊藤に言及する必要がある。彼の短からざる政治的生活の對象は、大隈ではなく伊藤であつた。彼は恐らくは伊藤を以て、其の正面の相手としたであらう。伊藤其人も同樣であつたらう。彼は天保九年戊戌の歳（一八三八）に生れたが、伊藤は同十二年辛丑の歳（一八四一）に生れた。卽ち彼は伊藤よりも三歳の兄であつた。彼等は少年よりの親友と云はずんば、相知であつた。彼等は其の家格も、均しく仲間であつた。而して實に安政四年、京都に時勢視察に特派せられた、六人中の二人であつた。

春輔は才子御見捨無之樣

慶應元年四月、高杉が山縣に與へたる書中の一節に曰く、

小生朋友中、聞多（井上馨）而已遺り、且最知己の事に付、必御輔佐被下候樣奉願候、春輔（伊藤博文）才子なり、御見捨無之樣、是亦奉願候。

政治界では伊藤が先輩

斯る文句より見れば、彼は年齡と與に、凡てに於て伊藤の先輩たる可きであつたが、政治界に於ては、寧ろ伊藤が先輩として、年長者たる彼、及び井上の上に立つた。それには伊藤が木戸、大久保、岩倉等に寵用せられ、重用せられたが爲めでもあらう。伊藤の政治的生涯は、明治の初期から中期にかけて、實に旭日冲天の勢があつた。伊藤は恒に帝國を背負うて立つ大政治家を以て、自から居つた。山縣は特に自から謙りて一介の武弁と稱した。彼には稠人廣座の中に於て、伊藤と其の座位を爭ふが如き、穉氣は無かつた。

伊藤山縣を畏る

併しながら伊藤の心中尤も畏れたのは、大隈でなく、山縣であつた。山縣は事

毎に必らずしも伊藤と爭はざるも、伊藤は山縣を以て、其の隱れたる競爭者たるを自覺せずして、止む能はなかつた。山縣は伊藤に對して、讓る可きに讓つたのみでなく、隱忍す可きに隱忍した。然も彼は、決して一介の武弁ではなかつた。亦た一介の武弁たるを甘んじなかつた。山縣と伊藤との取組は、恰も機山と、不識庵の如くであつた。山縣は何となく武田信玄流であり、伊藤は何となく上杉謙信流であつた。西郷從道は曾て冷語して曰く、『山縣さんと伊藤さんの取組は、中々化粧立が隙どる哩』と。

機山と不識庵

若し忌憚なく兩人の思惑を存分に語らしめば、山縣は云うたであらう、伊藤は言論の雄だ。議論は甘いが實行では物にならぬ。薄志弱行とは伊藤の謂ひだと。伊藤は云うたであらう、山縣は軍略を政略に用ふる、實に油斷のならぬ男だ。彼程ヱグイ奴はないと。併し此れは兩人の互ひにあら探しの言葉である。兩人與に誠忠の士、天下の大難、大事に際して、伊藤の第一の相談相手は、山縣であり、山縣の相談相手は、伊藤であつた。所謂る天下の英雄は、使君と操との

到底離れ難き因緣

互ひに相談相手

みとは、恐らくは明治二十年より、明治四十年に至る二十年間に亙る、彼等の關係であつたらう。彼等兩人はあらゆる點に於て、喧嘩はしつゝも、到底離る可からざる因緣があつた。

要するに伊藤は、政治家を看板にした政治家であつた。山縣は政治家を看板にせざる政治家であつた。彼の軍服と軍刀とは、彼に取りては一種の保護色であつた。然も彼は到底政治家たるを免れなかつた。山縣は恒に自ら赤電報の讀めぬ者は、首相たり難しと云うた。赤電報とは歐字電報だ。伊藤は屢ば其の得意の外國仕入の新知識を以て、山縣に對した。赤電報は伊藤の山縣に對する、最上の武器であつた、若しくは武器の一であつた。然も新知識に於ては、山縣は恐らくは伊藤の下には、就かなかつたであらう。

無看板の政治家

彼の知識慾は、實に食色よりも甚だしかつた。彼は外國語を解せざりしも、其

異常なる知識慾

の自から專門とする軍事は勿論、あらゆる方面に向つて、知識を吸收するに餘力を剩さなかつた。彼の身體は近年漸く活力を減退したが、其の精神は最後迄、彈力を失はなかつた。而して伊藤は、當初官僚の中心人物として立つたが、其の言動の漸く官僚の信望を繫ぐ能はざるに至り、伊藤の官界に開拓したる版圖は、殆んど擧げて山縣の握中に入つた。是れ山縣が伊藤の領土を、侵蝕したのでなく、自然の趨勢此に至つたのである。兩人の晩年に於ては、軍人は固より、あらゆる官僚は、伊藤に謳歌せずして、山縣に謳歌した。此の如くして山縣は、然るを期せずして、自から軍閥官僚の大本尊となつた。所謂る『大御所』の綽號は、不倫なるも、者般の消息を語りて、穿つ所ありと云はねばならぬ。

兩人晩年の勢力情態

伊藤の死後、彼の位置は、全く超越獨特のものとなつた。乃ち軍閥を罵り、官僚を嘲る天下の政黨者流も、表面は兎も角も、其の實際は相ひ競うて、彼の一顧盼を贏ち得るに、是れ汲々たる姿であつた。彼や實に一個人として、近世に

超越獨特の位置

殆んど比類なき、權力の所有者であつた。而して彼が之を所有する長、且つ久にして、然も能く其身を保つた所以は、彼が之を濫用せざるに歸せねばならぬ。否な其の權力の所有者として、然も之を所有せざるが如く、所謂る錦を衣て絅を尙へたる愼重、縝密の注意に歸せねばならぬ。彼は貧しき者の如くして、大いに富んだ。富める如くして、貧しき者とは科を殊にした。富とは財產ではない、政治的權力の富だ。

比類なき政治的權力

彼は近時のデモクラシーに就て、幾許の理解があつた乎。そは記者の知る限りでない。然も彼は政黨を以て、憲政の避く可からざる害毒とした。害毒である、故に自から手を政黨に下さぬ。避く可からず、故に政黨撲滅の如き、莫迦らしき手段を取らぬ。されば彼の政治の要諦は、一の政黨を以て、他の政黨を制せしめ、自から漁夫の利を占めんとするにあつた。

彼の政治的要諦

故に彼の註文通りを云はゞ、小黨分裂にありて、大黨專制ではなかつた。彼が

註文は小黨分裂

大隈をして、政友會を驅除せしめたのも、又た政友會をして、大隈黨を驅除せしめたのも、彼には何等の恩怨はなく、只だ其の理想を行うたに過ぎなかつた。縱令其の年齡と、其の立場とに、不相應なる新知識ありとするも、彼は要するに比公流儀の政黨操縱を以て、能事としたるに他ならぬ樣だ。此の一點に就ても、彼の獨逸化したる適例と思ふ。

政黨操縱が本意

彼が自から手を政黨に染めなかつたのは、單に其の軍職を帶びたるが爲めのみではなかつた。縱令軍職を帶びざるも、彼は自から政黨以外に立つて、政黨を操縱するを本意とした樣だ。併しながら此れが爲めには、其の親近者をして、若干の黨員を、統率せしむる必要をば、往々にして感じた樣だ。彼は政黨を致して、政黨に致されざるを以て、能事とした。然も自から之を試みるに於て、其の容易ならざるを體驗した。彼が自から政局の表面に立つを欲しなかつた理由の一は、或は其の苦き經驗を嘗めたるが爲めであつたかも知れぬ。

彼が成功の秘訣

彼は孫子の所謂る城攻めざる所あり、地爭はざる所ありと云ふ要語を實行した。乃ち其の力を儉約して、決して無用の方面に浪費しなかつた。彼の長所は、苟も作さゞるにあつた。而して恒に其の力を、有效なる方面に集中するを忘れなかつた。彼の成功の秘訣は、恐らくは恒久、累積、堅持、集注に存したであらう。斯る點に於ては、伊藤固より彼に及ぶ可きでない、況んや其他をやだ。

門下に人物の輩出

惟ふに維新以來、西鄕、大久保を除けば、彼の如く門下に人物を輩出せしめたものはあるまい。陸軍に關係ある、桂、兒玉、寺內の徒は勿論。淸浦、平田、大浦、曾禰、田の如き、何れも然らざるはなかつた。若し其の彼と個人的接觸を保ちたる者を擧げん乎。單に官僚、軍閥に限らず、所謂る政黨者流にも、江湖の政客にも、學者にも、實業家にも、其他一藝一能ある者にも、少からぬであらう。

隨處より羅致

彼は實に士を愛した。長閥の頭目と云ふも、彼の門下の重なる者は、隨處より

羅致した。陸軍の田村怡與造、福島安正の如き、官僚の清浦、平田の如き、其の類甚だ少からずだ。但だ不幸にして彼は、其の有力なる門下生を、彼に先つて喪うた。彼の政治的衣鉢を相續する者何人ぞ。平田、清浦は既に老いた。田中義一は、未だ其の資望が足らぬ。若し白根專一にしてあらば、或は彼の後繼者たるを得たであらう。

彼の晩年―亭々たる一大老樹

彼は宛も亭々たる一大老樹だ。其の葉は凋み落ち、其の枝は折れ挫け、雨打風虐、只だ直幹千尺、天を刺してゐる。彼の晩年は幸福と云はんよりも、寧ろ悲壯であつた。吾人が悲慘と云はずして、悲壯と云ふのは、彼が如何なる外界の刺戟にも、能く己を堅持して、自らの立場を、最後迄踏み怵へたからである。

藥籠外の除外例

最近三十年、日本のあらゆる文武の官僚、殆んど一人として、彼の藥籠中の物たらざるはなかつた。但だ重なる除外例として、陸軍出身者としては、高島鞆之助、川上操六があつた。然も高島は師團長としては、餘りあるの勢力を有したが、陸軍大臣としては、既に多大の陷缺を暴露した。川上は外は伊藤に結び、內は自個の勢力を扶植し、山縣に對し、隱然別個の勢力たらんとしたが、彼も軈て凋落し去つた。

西園寺と山本

陸軍以外に於ては、山縣の意の如くならざるもの、一は西園寺公望、他は山本權兵衞だ。彼等兩人の山縣に於ける、所謂る山法師、鴨河の水、賽の目同樣だ。彼等は種々の行掛りから、恒に伊藤と相ひ結んだ。西園寺の如きは、伊藤の後繼者として、伊藤からも擬せられ、自からも任じてゐた。

大隈一派

大隈一派は、政治上には沒交渉であつた。但だ山縣門下が、桂門下となり、桂門下が、大隈門下となりたる行掛り上、若干の干係を、晩年に生じたが。然も大隈一派を山縣の藥籠中の物と做すには、餘りに代物が尨大であつた。

民衆勢力の襲擊

近年に於て、直接に山縣の向ふを張る者は、個人としては殆んど一人もなかつた。然も玆に隱れたる一勢力があつた。そは社會的新勢力だ。平たく云へば民

衆の勢力だ。此の勢力は、五十年間、山縣の一生懸命に累積したる勢力に向つて、突喊し來つた。其の狀恰も急潮の砂丘に向ふが如くである。此れは何人の主唱でもなく、何者の刺戟でもなく、自然の大勢であつた。山縣は果して此の新勢力の擡頭に、氣付た乎、否乎。彼程の精錬せられた頭腦の持主であれば、よもや之を看過したではあるまい。假りに之を痛切に自覺しなかつたとするも、冥々的に暗示せられたに相違あるまい。

直接の挑戰者原敬

實を云へば、彼は其の現在の勢力よりも、長生した。彼の今日は、勢力でなく、寧ろ勢力の歷史であつた。彼の勢力に向つて、直接に挑戰したのは、原敬であつた。然も此れは原敬と云はんよりも、原敬が代表したる、新勢力であつた。而して此の新勢力は、急轉直下して、形に依り物を賦し、隨處に其の威力を發揮しつゝある。山縣の死するも、死せざるも、此の勢力の發揮には、差したる相違あるまい。然も少くとも彼の死が、其の一紀元であることを否定するには、

貧相なる家康

餘りに顯著なる事實である。

個人としての山縣は、長軀瘦骨の一老翁であつた。然も彼は伊藤の秀吉に肖たよりも、家康により能く似てゐる。家康は秀吉の評した如く、福祿圓滿なる大黑天であつた。然も山縣は直言すれば、貧相なる家康だ。然く貧相と云ふも、其の性格は、吾人をして家康を想起せしめずして禁む能はぬ。家康が偉大なる如く、彼も偉大だ。家康が抱擁力の大であつた如く、彼の抱擁力も決して小でなかつた。

雅量と大腹の持主

人は見掛けによらぬものだ。雅量と大腹の持主は、伊藤よりも寧ろ山縣であつた。彼の袋の口は極めて狹隘なるが如くして、其の奥は廣く、且つ深かつた。剛も吐かず、柔も茹はずとは、彼の人と事とに對する要訓であつた。彼は規帳面にして、極めて小六ヶ敷く、屑々乎、硜々然たる如き外容があつた。然もいざとなれば、如何なる事でも、做さゞるなく、忍ばざるなく、行はざるはなか

つた。乃ち平生苟も作さなかつたが、其の必要に應じては、大膽に、痛快に、思ひ切つて斷行した。乃ち平生彼に慊らざる者も、却て其の餘りに不謹愼なるに、驚く程であつた。政治家としては、明治、大正の年代に於ては、恐らくは彼を以て、其の第一人とせねばなるまい。

律義者の典型

元龜天正の頃には、中國の律義者てふ熟字があつた。此れは毛利元就以來の家風であつた。山縣の如きも亦た、中國の律義者たる典型を具へてゐた。此の律義者とは、決して莫迦正直を意味するではない。地味に、重厚に、脚元を見詰め、何事も一歩は一歩づゝ、踏み堅めて行くの謂ひだ。山縣流の筆法は、一切此通りであつた。彼には多くの偉人英雄に見るが如き穉氣がなかつた。如何なる場合にも、殆んど伊藤に於けるが如き天眞爛漫なるものを、見出し難かつた。彼は天下人心の愛好を繫ぐには、餘りに用心堅固であつた。然も彼の周邊に聚る者は、彼の溫情に感激せずして已まなかつた。彼にも相應の人間味があつた。

相應の人間味

實行以外に種々の別乾坤

彼は一介の武弁と云ひつゝも、文雅風流にかけては、其道の達者と稱せられた る伊藤の比ではなかつた。和歌の如きは、殆んど作家の域に入つた。詩も決して全くの素人ではなかつた。壯時往々書筆にも親んだ。其の筆翰の如きも、勁健、清拔、一種の風骨があつた。餘技仕舞、謠曲の如きも、造詣する所があつた。而して特に築庭に趣味を有した。彼の住宅は、必らずしも雅人の深致を示さゞるも、決して殺風景ではなかつた。彼は物の憐れも解した。情恨もあつた。彼は美に對する嗜欲もあつた。故舊を懷ふの涙もあつた。彼は實行家でありつつも、亦た能く實行以外に、別乾坤あるを解した。

知識の吸收力

彼は博覽强記を以て、大隈と爭ふ能はざるも、其の精細に文書を閲し、恒に彼の立場に相應する資料を充實するに於ては、殆んど何人にも追隨を容さなかつた。彼は其の接觸する總ての人より、其の所有する知識の全部を提供せしめずして、返へすを欲しなかつた。何人も彼に接して還る時には、絞られたるレモ

ンの如く、唯だ殼と糟のみたるを感ぜずしては、ゐられなかつた。短く云へば彼は精神的追剝であつた。然り掏兒ではなく、追剝であつた。

聽聞上手

大隈は說法上手であつたが、山縣は聽聞上手であつた。然も亦た微言、冷語、能く他の究所を刺し、興に乘ずれば、吃々として語るの際、理路井然、人をして他の高談雄辯よりも、より大なる感動を與ふるものがあつた。

皇室中心主義と帝國主義

彼は徹上徹下、皇室中心主義者にして、又た穩健なる帝國主義者であつた。彼を稱して武力侵略の頭目と爲すが如きは、誤解も亦た甚だし。彼は寧ろ餘りに外國を買被つてゐた。彼と雖も全く怖外病より蟬脫する能はなかつた。孔子は仁者は山を愛し、智者は水を樂しむと云うた。彼は水を樂んだ。彼の住する所、必らず淸淺の水なきはなかつた。若し孔子の言葉通りにすれば、彼は一代の智者であつたとも云ひ得らるゝ。

彼の住宅地

記者は往年萩に遊び、阿武川の邊、川島莊なる嚴島神社を過ぎ、彼の住宅地を見舞うた。如何にも蕭條たる部落だ。斯る場所から、彼が如き人物の產せんとは、殆んど思ひも寄らぬ心地がした。

彼には門地もなく、彼には富もなく、彼には特別の緣故もなく、全く彼の自力で、其の位置を贏ち得たのだ。出ては將、入りては相、乃ち小田原に閑居しても、尙ほ政局の中樞は、彼に在るが如き感を做さしめ。一人の威望、天下を壓する十數年に及んだのは、實に古今に比類なき生涯だ。彼の如きは眞に自から運命を開拓したる一人にして、單に此の一事を以てしても、彼は不朽の人物たるに足る。況んや忠誠君國に奉じ、始終一貫、其の志を渝へざるに於てをや。

自力にて運命を開拓

彼は不朽の人物

後世の歷史家が彼を見る、猶ほ吾人が元龜、天正、慶長、元和の諸雄を見るが如けむ夫。（大正十一年二月三日）

山縣老公八十一歳の誕辰

六月十二日、含雪老公を、番町新椿山莊に訪ふ。老公自から蒲柳の質と稱す。然も壽八十一路に躋りて、眼倍明、耳愈聰、神彌澄、朝案、暮牘、各般の文書を閲し、政事、軍務各種の賓客に接す。其の精神の旺盛、氣魄の雄厚、壯者なして後邊に瞠若たらしむ。話頭娓々として盡きず、去るに臨み、懷を探り、一紙を授けて曰く、是れ予が八十一歳誕辰の述懷也。君が知る如く六月十四日は、予が誕辰にして、毎年同日を以て、親舊の清集を催ほすを例とす。但だ本年は、曩きに時局の爲めに、觀櫻御宴の中止あらせられ、加ふるに新邸隘狹、衆賓を會するを得ず。惟ふに他時好機を得、小田原古稀庵に於て、此の憾を償ふを得ん乎と。其歌に曰く、

ながらへば所換ても祝ひてむ
　花に紅葉に時を擇びて

と。予は老公の彌や增し健康にして、此歌の事實に發現す可きを確信す。息壤此に在り、公の親舊、門下生、銘記して可也。（大正七年六月十四日）

新椿山莊記

新椿山莊を訪ふ

予支那漫遊を終りて、東京に還るや、宛も山縣老公の、小田原古稀菴を出でゝ、新椿山莊に在るを聞く、乃ち往きて之を候す。莊は半藏門の附近五番町にあり。老公予を見て、莞爾として卓上の紙片を示さる。之を讀むに、

椿山莊を去らんとしけるをりに

今日別るともまたやとひこむ　老主朋

溪水のすみ心地よき椿山

新邸に移轉しけるに新椿山莊と名づけゝれば

狹ばけれど事足る程の住ひかな

庭の築山水も流れて

蘇峰老兄以爲如何負惜み供一笑

感慨不禁

予之を一讀して、自から感慨に禁へざるものあり。公に質すに移轉の事を以て す。公細卷の紙捲莨を噓きつゝ、坐ろに語りて曰く、居を椿山莊に構へてより、已に四十餘年。今や桑楡景迫り、餘生幾許も無し。偶ま舊友の子藤田生、苦ろに割愛を請ふ。此に於て一木一石をも、舊觀を失はしめざるを條件として、之を讓與したり。天恩優渥、嚴冬、溽暑、老を湘南の古稀菴に養ふを、許し給ふも、未だ全く野鶴閒雲の身たるを得ず。此に於て地を舊邸趾に卜し、且らく玆に鷄巢を構へたり。然も地僅かに四百坪、之を西隣に購うて、別に二百餘坪を加へ、更らに建築成るに垂んとして、漸くにして北隣百坪餘を得たり。過日邸裡兒啼を聞き、之を止めしめんとしたるに、豈に料らんや隣家ならんとは。亦た以て其の湫隘、窮屈を知る可きのみと。

舊邸趾に鷄巢を構ふ

新居の概略を見る

老公の語る所此の如し、然も其の音容を察するに、其心新居に安著して、怡々、悠々たるものに似たり。是に於て更に請うて、其の概略を見るを得たり。門は斜に道路に面す。門内に圓き馬車廻しの植込あり。椿之が主木たり。大阪舊京橋の黄鍮の擬寶珠と、石獅子、此裡にあり。擬寶珠の銘に曰く、元和九癸亥暦四月吉日と。石獅子は、二十七八年戰役、海城より齎らし來りし一にして、明治大帝の特賜に係る、而して他の一は、御府に在りと云ふ。斯くして門内に、少くとも二臺の自動車出入して、其の不自由を覺えざる也。

擬寶珠と石獅子

二階立の洋館

二階立の洋館は、一切二階にして、書齋、居間、寢室、玄關を入れば、直ちに客室也。平時二室たり、必要に際すれば一室たるを得可し。客室を出づれば、大理石甃の外廊也。直ちに庭に對す。而して老公、及び家眷の生活は、其他あらゆるもの皆な辨ず可し。但だ食堂と、浴室とは、階下にあり。階上の書齋は南に面し、殆んど終日陽光を被ると云ふ。蓋し老公の一日中、最も多く

階上の書齋

の時間を、經過するは此室也。午前六七時起床以來、或は書見し、或は考索し、或は接客し、或は執筆す。壁に書棚あり、卓に文書あり。室内清素、一の長物なし、眞に老書生の生活也。

便室と日本館

其の便室には、一半西洋間とし、一半日本間となし、其の配合の妙を極む。是れ公の所謂る吾家工學博士の意匠に成るもの歟。洋館に接して、百餘坪の日本館あり。其の庭に接する座敷の他は、小なる莊嚴の佛間を除き、概して家從其他の住居にして、此の座敷こそ、和歌、謠曲等文藝の集會、其他晴れの宴席の爲めに、設けられたるものならむ。

庭園の布置結構

庭は玄關の一隅より起りて、細く、長く、南より西にかけ、街道に傍うて築かる。其の幅三間、廣さも四間に過ぎず。先づ高野山より五重の古石塔を獲來りて、其の冒頭となし。西洋館の外廊に面して、瀑布を作り、中心の位置を占めしめ、日本館の座敷よりは、其の瀧水の落ち行く樣を見せしめ。椿、松、椎等の常磐木を雜へ栽ゑ、函根より掘り來りし麥門冬を下艸となし、躑躅、其他の灌木を植込み。人をして坐ろに、深山幽谷の想あらしむ。時に日已に晩る、矛は電光に照らして、其の髣髴を得たるのみ。惟ふに寸土寸金に値ひする、都市的邸宅としては、殆んど理想的に庶幾きものゝ如し。

以て經營の意匠を見る

陶靖節曰く、『結ㇾ廬在ㇾ人境。而無ㇾ車馬喧。』と。新椿山莊や、其の庭牆を距る一歩、已に市衢也。深山幽谷の底、突如として販夫の叫聲を聞く、是れを殺風景と云ふも、一理あり。是れを風流の極致と云ふも、亦た一理あり。但だ椿山莊の廣袤、殆んど二萬坪の、大邸苑に比すれば、其の僅かに三十分の一たるに於て、始めて經營の意匠を見る可きのみ。

東都名園記と椿山莊

若し東都名園記を、編するものあらば、椿山莊は、必らず其の一に居らむ。蓋し天然の地勢を利用し、老松、幽篁、岡坡、清溪、一歩は一歩より奇に、一曲は一曲より妙、恰も韓文を讀むが如く、幽奥、深邃、人をして嗟嘆已む能はざら

退一歩の功夫と撙節謙抑

しむ。予は今年の夏、公の八十の賀宴に此に陪し、辭するに際して、是れが椿山莊の見納めかと思ひ、幾度か回頭せり。予尙ほ然り、況んや老公をや。

然も公の出處を稽ふるに、恒に退一歩の功夫を以て、一貫せり。看脚下は、老公畢生の學問の存する所也。他人騎虎の勢に乘ずる所、公却て轡を按じ、馬を勒して動かず。公は生平自から不敗の地歩を占め、七分の勝目に滿足して、決して十二分を求めず。撙節、謙抑は、公の家法也。公が晩節に際して、半生常住の吾家を去りて、新生活に入りしもの、豈に所以なしとせん哉。若し天下の勳將、功臣をして、其の心を秉る、悉く老公の如くならしめば、焉んぞ其の終を全うせざるを虞へん哉。

吾家の工學博士

予竊かに新椿山莊の經營の、極めて實用的にして、且つ雅致あるを見、建築技師の何人なるかを問ふ。老公哂て曰く、吾家に工學博士あり、之に一任せりと。蓋し其の內助の功を暗示したる也。

藝術方面の造詣

獨自一己の信念と其の深慮精思

公恒に自から謙して、一介の武弁と云ふ。然も公の藝術方面に於ける造詣や、一種の天品たり。之を南禪寺畔の無隣菴に見るも、之を古稀菴に見るも、將た椿山莊に見るも、其の地を夷げ、樹を栽し、山を築き、水を導く、戛々獨創、專門家の及ぶ可からず、又た及ぶ能はざる特長あり。其の風流、文雅の諸事に於て、亦た然るが如し。而して更らに推して、其の本領たる軍務、及び政治に於ても、恐らくは然らずんばあらず。

蓋し公は博く聞き、多く諮る、而して其の深慮、精思、殆んど究極なきに庶幾し。然も一旦猛然として決するや、自から信じて渝らず、必らずや之を徹底せずんば止まず。故に公の成す所、恒に型より入りて型を出づ。大事、小事、如何なる場合も、其の結局は、獨自一己の信念を以て、之を押し透すものに似たり。和歌、武術、能樂、築庭の末技に於て然り、出處進退の大節に於て然り。天下國家の大經綸に於て亦た然り。惟ふに新椿山莊の經營の如きも、亦た然ら

ずんばあらず。

新椿山莊の天然と人力

予更らに老公に向つて曰く、廣からざる面積に、建築を爲し。他をして、毫も其の狹きを覺らざらしむるは、建築の能事也。畫に於て然り、詩に於て然り、字に於て然り、小にして大を見、窄にして濶を見、偪仄にして、悠遠を見る。若し此の見地より評せん乎、新椿山莊は、椿山莊に優る萬々と云ふも、過言にあらず。蓋し椿山莊は、天然を以て、人力に勝ち、新椿山莊は、人力を以て、天然に勝つ。公の之に安んずる亦宜べなるかな、夫れ豈に負惜みと謂はん哉。

新築に伴ふ大功德

支那人の諺に曰く、一人道路を修築すれば、九族天に生ると。老公の居を移して以來、僕隷、輿儓の輩、目白阪上下の勞を免かるゝもの、幾許ぞや。是れ實に大なる功德也。此の大功德あり、新築と與に、公の福壽無量ならずんばあらず。

倍舊の健康

蓋し公近時の健康は、殆んど舊に倍し、其の視力の如きも、眼鏡を藉らずして、蠅頭の細字を書し、其の聽官や、依然として舊聰を失はず。其の記性に至りては、鮮明、精確にして、壯者も之に若かず。而して其の精力の博厚にして、倦ぶを解せず。智識慾の無垠にして、朝讀夕聽、饜くを知らざる、率直に評すれば、老人の新智識と云ふを妨げず。予は老公が、此の新築と與に、更らに其の健康に、一新紀元を劃し、長く曉天の明星たるを、祝せずんばあらずと。老公哂て答へず、唯だ首肯するのみ。

聊か所見を錄するのみ

新椿山莊の落成するや、九峰高嶋翁之が記を作り、井上博士以下、常磐會諸同人、各〻其の祝歌あり。予今諸君の後に從て、其顰に倣はんと欲するも、殆んど言ふ可き所なし。是に於て聊か其の所見を錄して、之を老公の左右に質すと云爾。（大正六年十二月十九日）

世外老侯

公人として誤解の生涯

世外老侯の永眠は、維新以來、何人の死よりも、最も多くの涙を、而して眞實なる涙を絞らしめたり。彼は公人として、其の長き半生を、誤解の間に經過したり。其の死に際する今日迄、或は彼を誤解し、彼を呪詛したる者なしとせず。されど彼を解する者は、最も深く彼を解し、彼を愛する者は、最も切に彼を愛し、彼の恩に感ずる者は、最も厚く彼の恩に感じたり。春畝公は、自から評して七分忠節三分俠と云へり。然も彼に於ては、忠節は固より然り、更らに其の俠骨に至りては、明治年間の幡隨院長兵衞も啻だならず。吾人は單に其の美點に就て爾か云ふのみならず、彼の短所亦た此の俠骨より來りしもの、多大なりしを疑ふ能はず。

七分忠節三分俠

彼の功業は冥々の裡

彼が維新の勳臣、明治の元老としての功科表を、計上するは、頗る困難の業たり。何となれば彼の功は、冥々の裡に存して、赫々の外に顯はれたるもの多からざれば也。彼は概ね緣の下の力持を以て、一生の事業となせり。特に維新以前、外敵と折衝し、毛利家再造の業を確實にし。更らに維新開幕より、明治四十二年伊藤公の死に抵る迄、兩人の功業は、之を合計し、更らに之を兩人に等分するを以て、其の平を得るものに庶幾しとす。伊藤公曾て一首の和歌を贈りて曰く、

伊藤公の贈歌

『國の爲め盡す心を　大君の知しますをも厭ふ君かな　吾兄の虛心國に盡せる志を思ひやりて　明治三十八年十月四日博文』と。蓋し此の一首は、彼の心事を道破したるものにして、彼に取りては、百萬石の御墨附よりも、難有かりしならむ。然り彼は天下の名畫墨跡を藏儲したるに拘らず、最後迄此の一軸を、其の至寶としたり。亦た以て兩人の交態を見る可く、復た以て彼の本領の此に存するを知る可し。

顯はれたる一二

然も其の顯はれたる一二を擧れば、彼は維新の當初に於て、其の大勢を刺戟する鐵鞭たりし也。廟議紛々、德川慶喜の大阪より上京するの可否に就て、決する所なし。三條卿之れを彼に問ふ、彼昂然として三條卿に答へて曰く、上京の得失

は、論ずるを要せず。希くは予を三日間、公卿たらしめ給へ。然らば内大臣たる慶喜に接して、直ちに之を刺殺せむと。山内容堂が、討幕の措置に就き、異議を唱ふるや、彼泰然として曰く、幕府八百萬石に加へて、土佐二十四萬石を、召し上げらるゝは、朝廷に取りて、意外なる仕合せ也。容堂にして異議あらば、勝手に歸國せしめ給へ、是れ彼は朝敵たる也と。復た以て當時に於ける、彼が意氣を追想するに足る。是れ豈に五尺の短身、渾て是膽なるものにあらずや。

彼と山内容堂

彼と廢藩置縣

天下朝政に歸するも、人心恟々未だ定らず。一日鳥尾小彌太、野村靖彼を訪うて曰く、爰に一大事の談ず可きあり、君にして與みせずんば、君の頸を頂戴せねばならぬと。彼遮りて曰く、多言する勿れ、そは廢藩置縣の事ならむ。果して其事ならば、予の之を思ふ既に久しと。此の如くして彼は策を兩人に授けて西郷、木戸、大久保の一致合力の下に、明治四年七月廢藩置縣の擧は、斷行せられたる也。若夫れ其餘を承けて、彼が明治政府の諸紙幣、及び三百餘藩の銘々

諸紙幣藩札の處分

發行したる藩札、預手形、其他藩債の處分等に就ての功績に到りては、今尚ほ埋沒して、多く天下に認められざるものあり。其功實に偉大也、然も是れ其の一端に過ぎず。

表面に較著の功績

彼が二十七八年役に際して、身を挺して、朝鮮公使となり、改革の重責に膺り。將た三十七八年役に於て、松方侯と與に、財政方面に努力したるが如きは、特筆する迄もなし。其の明治二十年條約改正の如きも、此が爲めに或は法典編纂を速成し、或は諸制度を更正し、條約改正其の物は、失敗に歸したるも、後人の爲めに荊棘を芟りたる効は、沒す可きにあらず。然も如上は唯だ表面に較著なる例を擧げたるに過ぎず。彼の功勞は、何處迄も冥々の裡にあり。彼が何等の武勳なく、又た曾て一度も首相の位置に躋らずして、元老の一員たり、特に有力なる一員たり、元老會議の常任幹事たるが如かりしは、職として之に歸せずんばあらず。然も彼の重なる勢力は、朝に於てせずして、野に於てせり。此の

野に於ける勢力

方面に於ては、所謂る長州三尊の二人、伊藤も、山縣も、彼に雁行するさへ容易ならざりしが如し。

財界の大立者

惟ふに伊藤の文勳、山縣の武勳、天下其匹少し。特に山縣公の如きは出ては將、入りては相、門下に官僚あり、學者あり、各方面の異材あり。然も其の野に於ける勢力の、遂ひに井上侯に及ぶ能はざるは何ぞや。是れ井上侯が財界の大立物たりしが爲めのみ。今や天下の財權を三分して、其の二分は、殆んど井上侯の手中に存するの狀あり。是れ何を以て然る乎。

木戸松菊と伊藤井上

木戸松菊の語りし所として、傳聞する所によれば、曰く若し面倒の論客來るに際して、伊藤を應接せしめん乎、必らず何とか說破して、之を退去せしむ。若し窮乏に際して、井上に相談せん乎、必らず何とか金策して、之を間に合せりと。是れ宛も兩人の長所を的破したるものにあらずや。井上侯は財務に於て、

財務に於て夙好

夙好あり。彼は上は國家の財政より、下は個人の家政に到る迄、恒に孜々、汲々、商量するを以て、殆んど其の快樂の一と做せり。而して彼の經濟眼は、寧ろ局部的に聰明なりしが爲めに、國家經濟よりも、個人經濟に於ては、却て其の有効力を發揮したるが如し。況んや之を遂行するに、用意周匝なる老婆心と、一毫假藉せざる酷吏的態度とを以てしたるをや。

財界の一大統制力と一大調和力

毛利家、三井家は勿論、凡そ天下の富豪にして、彼を監督とし、彼を後見とし、然らざるも彼を顧問とせざるもの幾許もなし。彼は或る意味に於ては財界の一大統制力たり、或る意味に於ては、財界の一大調和力たり。彼の位地は政府に對する、實業界の常任全權大使と云ふも、過言にあらず。實業家をして今日の位地を占取せしめたるに至りては、直接彼の庇護を被らざるものと雖も、亦た彼に向つて感謝す可き理由なしとせず。彼の逝くや、天下の富星は、內田山に集れり。天下何人か百萬長者を以て、玄關の受附たらしめ得るものあらん哉。桂公は固より、伊藤公の如きも、此に至りて、世外老侯に對して顏色なしと云ふ

人生矛楯の一大塊

可し。

然りと雖も吾人をして、彼に就て最も特筆するの必要を感ずるは、元老としての彼の功業にあらず、個人としての人格也。凡そ世に矛楯の性を帶ぶるもの、未だ彼の如く甚だしきはなし。彼は實に人性矛楯の一大塊也。彼は雷と呼ばれ、八ヶ間敷屋の親玉也と稱せらる。然も彼の慈眼柔腸は、實に一滴の涙、能く人を終生其の厚情に感激せしむ。彼は實に氣乘り氣隨に言動する、單刀直入者也。然も時としては其の精思熟圖、他の企て及ぶ可からざるものあり。彼は正直者にして、却て權數あり。頑固漢にして、能く變ず。人は彼を鄙吝と云ひ、時としては貪慾と云ふ。然も彼は時としては家をも、身をも顧みざることあり。彼は凝性也、歐化論の如き、大農論の如き、其の之を主張するに際しては、天下を擧げて、此の以外に大事なきが如かりし也。然も乍ちにして忘れたるが如く、之を曖にさへ出さゞる也。彼の人に對する、時としては亦た此例を適用す可きもの

彼は凝性

なしとせず。其の一たび愛するや、殆んど之れを撫で、之れを舐り、之れを眼の中にも、入れ盡さずんば止まざらんとす。されど一たび愛衰へ、寵褪するや、更らに顧みざることあり。然も是れ徒らに彼の感情の、偶變とのみ云ふ可からざるや論なし。人或は彼を電光と稱す、蓋し彼の一たび然かせんと思ふや、電光の發射するが如し。矢も鐵砲玉も及ぶ所にあらず。されど其の意轉じ、氣移るや、乍ち消えて痕なき也。

電光一閃忽ち消失

彼の恩顧の士にして、彼を熟知したる故古澤介堂は、曾て語りて曰く、井上侯はそれ明治の張子房歟と。彼が蕭曹たらず、淮陰侯たらずして、冥々の功を積みたるや同じ。其の膽氣異常なるや同じ。其の本能的機知の、或る刹那に湧出するや同じ。されど若し張子房とせば、彼は上品の張子房にあらずして、下品の張子房也。赤松子に從て遊ぶの張子房にあらずして、濁世に富豪を集めて遊ぶの張子房也。桂公曾て曰く、井上侯は時としては人間にあらずして、神樣と

下品の張子房

思はるゝことあり。彼は全く己を忘れ、己の地位を忘れ、己の一切を忘れて、他に盡さんとすと。固より彼も常住己を忘れたるにあらざる可し。否な吾人は公平に觀察して、彼も亦た主我的の動物かなと思ふ節なきにあらざりしも。此の時として己を忘れたるは、事實也。此の時として己を忘る一事に於ては、伊藤公、山縣公と雖も、恐らくは彼に企て及ばざりしならむ。彼等は未だ曾て片時も己を忘れたることなし、彼等の本領は、却て己を忘れざるに存し、井上侯の本領は、其の己を忘れたる刹那に存すと云ふを以て、確論に庶幾しと爲す可きに似たり。

己を忘る

彼の特色は不羈

彼の特色は、不羈なるにあり。薩摩の榮翁、池田家の一心齊等はいざ知らず。凡そ今日の世の中に、彼が如き我儘、氣儘の漢はあらざりし也。然も是れ權勢富貴の頂上に達したる今日に始まりしにあらずして、彼は生れながらに然りし也。否な彼は生れながらの此の性僻を矯修す可く、制錬す可く、餘りに其の一徹の根性が勝りし也。彼は此の意味に於て、大なる駄々兒也。彼が雷と呼ばれ、電光と稱せられ、社會より誤解せられ、交友より迷惑がられ、其の半生に兎角の波瀾を坌湧せしめたる一半は、職として此に坐せずんばあらず。人或は彼を鬼子母神と云ふ、そは己の兒孫を養はんが爲めに、他の兒孫を取り喰ふを意味する也。彼は兒分の爲めには、如何樣なる心配を做すも、此が爲めに他方面に如何なる損害を來たす可き乎に就ては、往々閑却することなしとせず。彼が其の庇護する實業界の請要を持出して、屢ば當局者を困惱せしめたることは、掩ふ可からざる事實也。されど是れ彼が、幡隨院の本領を發揮したるのみ。長兵衞の腕を揵して、顧盻するや、豈に其の眼中天下の法度あらんや。

鬼子母神

消極論を以て始終

財政家としての彼の立場は、意外にも彼の進攻的性格と反對して、消極論を以て、始終せり。其の明治六年、歳計出入不釣衡を理由として、辭職して以來、今日に至る迄、自からも世人が井上の消極論とて、其の暖簾たるかの如く看做し

官業反對者

たるを苦笑したり。彼は官業反對者也、彼は徹頭徹尾官業の非事務的にして、單り私立の營業を壓迫、妨害するのみならず、自から屋上屋を架し、却て徒らに相ひ衝突するの弊害を指摘したり。彼は實に國家の財政に對する常住の防火夫たりし也。彼の平生口にしたるは、業務連絡（コンビネーション）の一事也。然も今日に於ては、殆んど多く顧みられざりし也。然も尚ほ霜夜の警鐘たるを失はざりし也。

死中求活の一大作用

若し强ひて彼の短所を擧げば、彼には大局的達觀を缺けり、此點に於ては彼は伊藤の指導を俟たざる可からず。彼は始終一貫、首尾徹底の經綸を缺けり。此點に於ては、彼は山縣に下ること數等也。然も機に臨み變に應じ、死中活を求むるの一大作用に至りては、彼の長技にして、然も之を行ふに、金石亦透る井上流の筆法を以てす。親分は彼の本色也、世話燒きは彼の本業也。彼が自から內閣を組織せんとするや、其の意中の人たる桂公は、最初に之に反對したり。澁澤男は自から辭退し、併せて彼を諫止せり。然も彼は讒りて桂公を首相に推し、自から甘じて其の藏相たる可しと云へり。其の胸襟何んぞそれ落々たる乎。桂公が井上侯は、時として己を忘ると云ひしは、斯る實驗に徵しての言にあらざるなき乎。

讒て桂公を推薦

薩人と相容れず

山縣公は當初より西鄕兄弟と提携したり、伊藤公は大久保によりて、其の經綸を行へり。されど彼は薩摩人とは、當初より相容れざりし也。薩人の多くは彼を目して、奸物の標本となせり。薩人に奸物視せられたる大隈伯さへも、大久保甲東に追隨して、伊藤公と其の兩翼たりしも、彼は大久保の世を去る迄は、大いに其の力を伸ぶるの機會を得ざりし也。是れ彼の不羈の性質、然らしめたるにあらざるなき乎。

衝突し忽ち退去

彼の廢藩置縣後、大藏大輔たるや、大藏、內務、農商務、遞信各省の事務を一手に總攬したり。彼は殆んど事實上の首相たりし也。然も其の一たび江藤新平と、豫算問題にて衝突し去るや、乍ち世を忘れたるが如く、其の兒分を率ゐ、

大阪會議の脚色

身を商界に投じたり。而して大久保、木戸等の反目し、薩長相ひ軋轢し、時事の憂ふ可きを見るや、明治政史の所謂る大阪會議なる一齣は、彼によりて脚色せられたり。彼が明治八年に於ける大阪會議は、尙ほ本年支那談判後に於ける元老會議の如し。時局收拾の丹心、禁ぜんと欲して克はざれば也。

一意盡國の精忠

彼の出處進退、行藏卷舒は、此の如く往々にして常人に不可解なるも、何人も虛心にして、之を考慮すれば、其の一意君國に盡すの精忠は、之を諒とするに吝かならざる可し。世末だ其の友に忠にして、君に忠ならざるものなし。友家に親切にして、國家に不親切なるものなし。彼の生涯八十餘年は、傍若無人、瑕瑜相ひ掩はざるにせよ、其の己れの爲めの生涯にあらずして、他の爲めにしたる生涯たることは、彼が死後、天下彼の爲めに慟哭する者の多きを見て、之を知るに難からず。時に渾身是れ熱火、時に渾身是れ冷鋼、時に渾身是れ血涙、

眞骨頭ある眞男兒

時に渾身是れ我慢、其の發作一ならざるも、其の眞骨頭ある眞男兒たるは、敵も味方も異存なし。桐野利秋曾て嘆じて曰く、若し井上聞多が、士族兵の一大隊も率ゐて來らば、誰も其向に立つ者はあらざる可しと。彼の力や、實に萬夫不當たりし也。彼は事の大小輕重に拘らず、殆んど此の力を以て當れり。所謂る獅子兎を搏つにも、全力を用ふとは此事也。他人六七分の所、彼は十二分にあらざれば休せず。彼の首相たらざりしも、此が爲め也。其の首相たらずして、首相以上の有力者たりしも、此が爲め也。彼の一生に就て、一切を乘除し來るも、彼や實に一代の人豪たりと云ふ可き夫。（大正四年九月七日）

彼の力や萬夫不當

實に一代の人豪

大山公を弔す

大山元帥の薨去と國家の缺陷

大山元帥の薨去は、我が朝廷をして、一の重臣を失はしめ、我が軍隊をして、一の老將星を失はしめ、我が國家をして、一の大人を失はしめ、我が社會をし

て、一の前代の活ける、歴史を失はしめたり。是れ實に容易ならざる缺陷也。天下何人か公の長逝を、深悼せざるものあらんや。平生何人も氣附ざる庭石も若し之を取り去らん乎。乍ち滿庭の配合に異狀を生ずることを、見出さずんばあらず。乃ち公の存在を、平生念頭に措かざる輩さへも、今に至りて爽然自から失するを禁ずる能はざるものあり。況んや本文の記者の如き、聊か公の一身の天下に關係する所、少からざるを知り、且つ曾て屢ば誨を門下に忝うしたる者に於てをや。

帝國軍務の基礎を大成

若し恐れながら　明治天皇を以て、太陽に擬し奉らば、公は其の周圍に羅列する、群星の一たりし也。公の功業は、明治の史上に赫灼たり。乃ち武勳に於ては、十年の役、二十七八年役、三十七八年役、何れも公は實戰に臨み、或は偏帥となり、或は總帥となり、其の殊勳を奏せり。而して事是よりも大にして、却て世に現はれざるは、公が帝國軍務の基礎を定め、之を大成したるにあり。

明治十七年の洋行

是れ固より公一人の力にあらず。行輩中の先進、若しくは同僚としては、山縣元帥あり、故西鄕侯あり。其の後進、若しくは部下としては、桂、川上、兒玉、寺內等の諸將あり。然も若し帝國の軍務に就き、其の功勞者を個人に求めば、山縣元帥を第一位とし、公を以て次位とするに、何人も異存なかる可し。桂、川上、兒玉、寺內、其他の奇材、異能の士をして、克く其の所長に從ひ、其力を竭さしめたるもの、固より公が大體を持し、鈞衡を秉るや公平に、時務を見るや明白に、而して其の心休々焉として、能く容れ、能く斷じ、能く行ひたるに由らずんばあらず。特に公の明治十七年の洋行は、我が陸軍の歴史に特筆す可き、一紀元を劃したるもの也。而して公が桂、川上兩人に向つて、互に戮協し、帝國陸軍の爲めに、貢獻す可きを諭したるも、亦た此時にありとする也。

薩州諸先輩中の智者

人或は公を評して、茫漠たりと云ふ。然も吾人は何れの方面にも、公の如く要領を得たる人を、見出さゞる也。公の幹軀は、魁梧にして、其の居動詳重なりし

が爲めに、或は然かく思うたる者もあらむ。然も維新以來、薩州の諸先輩中に於て、眞に所謂る智者ありとせば、乃ち公たらずんばあらず。故西郷侯の應變の機略、一世を籠絡するの術數を以てしても、其の智に到りては、公に讓らざるを得ず。然も公の智は、自から私するの小智にあらずして、天下の大局に處するの大智也。是れ公が鹿兒島の一寒士より、人臣の極位に躋り、而して五十餘年の公生涯中、遂ひに一個の敵をも、見出さゞりし所以たらずんばあらず。古人曰く、其智には及ぶ可く、其愚には及ぶ可からずと。愚は智の極致也。唯だ我が大山公に於て、之に庶幾し。

大局に處するの大智

日本帝國の大政と薩長人士の力

如何に藩閥を攻擊しても、戊辰以來明治二十三年、帝國議會開設迄は、日本帝國の大政は、薩長人士の力にて、運用し來りし也。戊辰前後には、西郷、木戸、大久保あり。明治六年より、明治十一年迄は、大久保あり。但だ大久保死後の明治政府は、賴ひに雄邁、老練なる岩倉公ありしも、政府の基礎は、幾回か動搖したり。然も此際に於て、薩長が互ひに內に相ひ鬩ぎつゝも、外に向つて一致したる所以は、一方に伊藤、山縣あり、他方に西郷、大山ありしに由らずんばあらず。蓋し故西郷侯は、天下無双の脇師也。或は伊藤公を相手とし、或は山縣元帥を相手とし、時としては大隈侯を相手としてさへ、向ふ所可ならざるはなかりし也。大山公の役目は、西郷侯の如き、晴役にあらざりし也。然も公は蚤に薩長の協戮して、先輩の遺業を大成せざる可からざるを知れり。而して長派に於ては、文に於て伊藤を本尊とし、武に於て山縣を本尊とするを知れり。此に於て公は此の兩人と相ひ提携して、未だ曾て一毫の芥蔕あらざりし也。而して伊藤、山縣兩公も、亦た大山公に向つて、恒に信賴す可き政友、若しくは僚友として、相ひ待ちし也。

伊藤と山縣、西郷と大山

其在る所重きを爲す

人或は公の寡默を稱す。然も公の無言は、他の雄辯よりも、有力なる雄辯たりし也。公が發言するにせよ、せざるにせよ、如何なる場所に於ても、公の在る所、

必らず其の重を爲せり。公は同僚としても、上長官としても、決して唯々、諾諾の好々翁にあらざりし也。公は胸中恒に見解あり、而して其の所信を一貫するに於ては、凛然犯す可からざるものありし也。公は小節に區々たらず、然も其の進退必らず據る所ありし也。人を使ふ寛大也。然も決して放慢ならざりし也。故桂公の如きは、大山公の陸相時代の部下として、最も其力を竭したる一人也。曾て記者に語りて曰く、予未だ此の時代程、骨の折れたることはあらざりし也と。蓋し公は一切放任の、長上官にあらざりし也。

進退據る所あり

偉大なる個人主義者

公の智は大勢を見るに長じ、人を鑑別するに長じ、特に自から處するに長じたり。公は或る意味に於て、個人主義者也、親分もなければ、兒分もなし。從て藩閥心もなければ、黨閥心もなし。然も亦た利己的個人主義者にあらずして、偉大なる個人主義者也。公は一個の薩派の長老にあらずして、其の心は恒に帝國の上にあり、其の眼は恒に世界の大局にあり。公は恒に自個と、周圍とを調和して、大勢に順應したり。されば公の一生を始終して、未だ曾て逆流に棹したることあらざる也。

寧ろ中正主義者

公を稱して、進歩主義者と云ふ能はずんば、寧ろ中正主義者と云はざるを得ず。公は決して大勢に先つが如き、冒險者にあらず。又た大勢に取り殘さるゝが如き、間抜者にあらず。公は恒に大勢の酣暢なる中心を趨歩せり。其の結果は、何等世人の視聽を聳動せしめずして、恰も自然力の作用の如くして、今日あるを致せり。

自から知るの明

何人も公に及ぶ可からざるは、自から知るの明にあり。此の一點に於ては、維新功臣中、明治元老中、唯だ大山公あるのみ。公は決して他の煽動に乘り、挑發に應ずる人にあらず。公は決して自から色氣を出し、野心を逞うする人にあらず。公は豫じめ自個の立場を定め、其れ以上の事には、其れ以外の事には、何等干係せず。然も其の分内の事に於ては、斷々乎として、一歩も他に假藉せざ

公と其の分内の事

りし也。其の二十七八年役に、第二軍の軍司令官たり、三十七八年役に、滿洲軍の總司令官たりしが如き、固より公の分内の事として、公は踴躍此に從ひしが如し。公は決して無圭角の泥塑人形にあらず、唯だ自個の勢力範圍を劃定して、漫に多方面に手を差出さゞりしのみ。然も天下何人か、敢て公の分内に立ち入るを得る者ぞ。乃ち此の氣象は、公が晩節、内大臣として、尤も鮮明に發揮したり。但だ事宮中の密勿に屬し、吾人は之を明記するを戒愼するのみ。

所謂る主一にして清靜

人或は公の功名心無きを稱し、恬淡にして、貨財の念有らざりしを讃す。然も是れ唯だ公を、仙人化したるのみ。公は仙骨にあらず、人間也。既に人間なれば、其の弱點に於ても、人間に共通す可きは勿論也。但だ公は彼我の差別、自他の差別、公私の差別を明白にし、敢て他の煩累を招かざりしのみ。勳業の高きを欲するも、政治に容喙せず。家道の隆昌を期するも、貨殖に奔走せず。所謂る主一にして、清靜なるは、公の守身、處世の要訣たりしにあらずや。是れ吾人が公を稱して、偉大なる個人主義者と云ふ所以也。

胸中には人物を臧否

公は資性寛裕なりしも、其の胸中には、人物を臧否せり。愛憎なきにあらざりしも、私情の爲めに、公事を枉げず。而して其の烱眼、明識は、地中の水が、自然に噴出するが如く、重厚なる公の口を衝て出で、或は奇譎となり、或は冷刺となり、覺えず眼前の情僞を暴白して、其の本相を露呈するを、禁ずる能はざらしめたり。公の人に接する恭敬にして、何人も其の親しむ可きを知るも、亦た決して其の狎る可からざるを知れり。

南洲の誠慤と大山公

蓋し公は南洲の從兄弟にして、其の血管には、固より英雄の血あり。殊に故西鄕侯と與に、壯時より恒に南洲に親炙し、陰に軍國の大事に參與し、其の感化を被る、多大なりしが如し。而して南洲の濶達は、故西鄕侯之を得、其の誠慤は、大山公之を得たり。記者曾て本年九月一日の午後、公を新橋停車場に見る。公が時局の艱險を傍觀する能はず、炎熱を侵し、國事の爲めに奔走しつゝある

を察し、心竊かに公の晩節の、愈よ馨しきを欽仰し、其の長へに、斯君と、斯民との爲めに、冥々の力を致されんことを祈れり。而して今や溘焉として逝く、豈に悲しからずや。嗟吁南洲の遺韵、公と與に去りて、愈よ遠し。

模範的好家庭

若夫れ公が家に賢夫人あり、良子女あり、家門雍穆にして清淨、所謂る模範的好家庭を作したるに到りては、現代の上流社會を通じて、殆んど其匹罕なりと云ふ可し。唯だ此の一事を以てしても、亦た以て公の德を頌するに餘りあり。

嗚呼哀夫。（大正五年十二月十二日）

高島子爵

奇偉卓犖なる一人物

大正時代は、高島子爵の長逝によりて、奇偉卓犖なる一人物を喪へり。彼が現時に於ける、猶ほ前世紀の動物の、當世に殘存したるが如し。若し世用たらずんば、少くとも前代豪傑の標本として、後進の欽仰する所たりし也。豈止だ薩派凋落の今日、其の重鎭を喪ひたるを惜しむのみにして已まん哉。彼の眼中には、藩閥なし。彼は實に天下を狹とし、東亞を小なりとしたる大腹を有したり。

高島子爵の出身

彼は和蘭國王より、諸外國の來迫を我が幕府に警告し來りたる、弘化元年に生る。彼は文久二年十九歲にして、島津久光の衞兵として、京都に上り、明治戊辰の役には、二十五歲にて、監軍として伏見鳥羽より、北越に轉戰したり。明治四年、彼は西鄕南洲の拔擢にて、宮內省に入り、侍從に任じ、翌年侍從番長となる。彼が吉井、村田の人々と與に、明治天皇の御身邊に奉仕するに到りたるは、實に南洲の彼を蚤に器許したるによらずんばあらず。七年陸軍大佐となり、十年の役、少將に進み、別働旅團を率ゐ功あり。十二年佛獨諸國に差遣せられ、而して十四年大阪鎭臺司令長官となり、二十一年第四師團長に補し、二十四年第一次松方內閣に入りて、陸相となる迄、前後十年强大阪にあり。斯く

明治天皇に奉仕

て第二次伊藤内閣の末期、三十年拓殖務大臣となり、やがて第二次松方内閣の陸相となる。彼は現に樞密顧問官として逝けり。

公的生涯と在阪時代

彼の官歷には、何等の複雜したる葛藤なし。されど彼の公的生涯は、明治の政史に、少からざる影響を與へたるものなからず。彼の大阪にあるや、東京に對して、隱然一敵國の看を做せり。彼や一個の師團長として、關西に於ける、政治、實業、社交、其他一切の中心點となれり。官民の阪地を經由するもの、概ね先づ彼に趨りて、而して後其の目的の地に赴けり。惟ふに彼の一生一代の得意時代は、實に在阪十年間たりしならむ。

内閣破壞者の評判

第一次松方内閣の破壞に就ては、彼必らずしも其の責任者にあらじ。されど第二次伊藤内閣と、第二次松方内閣の破壞の張本人は、彼なりとして世間に知らる。固より彼は破壞せんが爲めに、破壞したるにあらず。第二次伊藤内閣の末期に於て、彼は二十七八年戰役の後を承け、擧國一致内閣を組織するを得策とし、松方、大隈、板垣を入閣せしむ可しとなし。此れが動機の一となりて、瓦解したり。第二次松方内閣の末期に於ては、松方侯をして、專任藏相たらしめ、西鄕侯を以て、首相たらしめんとし。此れが動機の一となりて、瓦解したり。彼は決して惡意を有したるにあらず。されど一たび見る所あれば、周圍に頓著なく、我が意を行はんとする也。此の如くして彼が内閣破壞者たる評判は、中外に高く。彼の先進、同僚、動もすれば彼を危險人物視し、此の如くして彼は

彼の晩節

其の晩節を、伏櫪十里の感慨中に經過したり。若夫れ大正政變に際して、彼が如何なる役目を働らきたりし乎、そは吾人の知る限りにあらざれども。運動者の一部が彼を首相に擬したるを見れば、彼の冥々の間に於ける働らきも、亦た推測するに難からざる也。

一個の人物―南洲の典型

然も吾人が彼に取るは、武人としてにあらず、政治家としてにあらず。一個の人物として也。故稅所篤翁は薩人の長者にして、人を知るの鑒あり。嘗て語り

て曰く、今日に於て、南洲の典型を見る可きは、唯だ高島のみと。彼も亦た南洲に私淑し、南洲亦た彼を愛重したるは、彼の儕輩の與に許す所也。彼や氣宇高亮、胸次開豁、志は天下にありて、一身一家の溫飽にあらず。其の腹底には、幾許の猛夫、策士、あらゆる横著者、厄介者、手に合ぬ者をも、土足の儘蹈み込ましめて、綽々たる餘地を剩せり。彼は實に豪傑たる可き異常の天稟を具へたり。彼に憾む所は、餘りに其の自力を恃みて、之を玉成するを閑却したるの一事のみ。

彼の氣宇と其の腹底

彼や膽略の人を兼ねたるのみならず、復た一片の至情あり。才を憐れみ、士を愛し、老母に孝に、舊故に敦く。而して彼に請ふ者あれば、誰に對しても、殆んど一否字を口にせざりしが如し。本文の記者の如きは、彼の知遇を忝うすること二十年。一たび彼を見る毎に、恰も沙漠中にて、椰子林を見出し、清蔭の下、冷泉を掬するの心地せずんばあらざりし也。彼は金錢を見る、糞土の如し。其の鑛山に手を出したるが如きも、政界雄飛の資を獲んと欲したるのみ。然も事は志と違ひ、彼の家道は却て此が爲めに其の困難を倍蓰したり。蓋し彼は餘りに大腹にして、殆んど人を見るに無差別なりき。而して彼は屢ば小人狡兒の爲めに、之を濫用せられたりき。此の如くして彼の後半生は、意外なる厄難を、恒に彼に齎らせり。然も彼の强項にして、我慢强き、唯だ獨り兀々として、苦杯を滿喫せり。彼の志亦た憐む可きにあらずや。

一片の至情あり

金錢を見る糞土の如し

彼の政治家としての缺點の重なる一は、他人と歩調を合せざるにあり。彼は協同生活の一員としては、餘りに我儘也、餘りに直情徑行也。されば一たび彼と事を與にしたる者は、之を再びするの勇氣なき也。此の如くして彼は自から政界の大立者にてありながら、遂に孤立せざる可からざるに到れり。如何なる大木も、獨樹以て林と爲すに足らず。彼の下に集る者は、無名の雜草にあらざれば、灌木、荆棘の類に止まれり。先輩及び同輩は彼の破壞刀に辟易し、後輩は

他人と調和せず

彼の脫線力に閉口す。彼が首相たる可き襟度と、力量とを有しつゝ、而して其志は、死に抵る迄此に存したりしに拘らず、之を遂げざりし所以の一は、豈に此に由らざらんや。

大醇にして大疵

彼は醇乎として醇ならず、寧ろ大醇にして大疵ある人物也。然も彼に接觸する者は、彼の溫情に魅せられて、殆んど彼の缺點を忘却せしむるに到れり。故山地獨眼龍の如き、眼中一物なき底の猛將も、一たび彼の前に至れば、恭謹の君子たらずんばあらず。故河島醇は薩人中の奇男兒にして、容易に其の先輩に許さず、但だ故西鄕侯と、彼とに對しては、讃嘆措く能はざるものありし也。彼は實に猛獸使ひの手腕あり。誰か彼に屠龍の技なかりしと云ふ乎。吾人は之を試みるの機會を彼に與へざりしを、終天の遺憾とするのみ。（大正五年一月十五日）

猛獸使ひの手腕

大浦君の爲めに

大浦君死去の電話

九月三十日の夜、大浦君が死したとの電話を、受取つた時には、驚くよりも、寧ろ之を信じ得なかつた。予は君が近狀を詳かにし、其の心身の頗る堅勝であつたことを、熟知し居たからである。併し事實は、何處迄も事實だ。

一生を大浦式で始終

若し世の中に、悲慘と云ふ熟字に當て嵌める、出來事があつたならば、そは大浦君の晩節だ。然も彼は悲慘を、當面に暴露するには、餘りに剛腸男兒であつた。彼は其の胸中萬斛の遺憾を湛へつゝも、鎌倉に一個の樂隱居として暮らした。而して其の死狀さへも、電擊的腦溢血で、唯だ一刹那に絕息した。生きるも大浦式、死するも大浦式。彼の一生は、大浦式で始終した。

自助と努力の生涯

彼は薩摩人ではあるが、城下の士族ではない、宮之城の出身で、云はゞ又者（またもの）だ。芋ではあるが、先づ馬鈴薯の類だ。彼は一個の邏卒より、成り上りたるもので

あつた。彼は全く爪の垢程も、藩閥の恩惠に預つて居らぬとは云へまいが、それでも九分九厘迄は、他力でない、自力である。彼は自助の人であつた。彼の一生は、實に努力の生涯であつた。實に其の職務に、一身を投沒したる生涯であつた。實に所信に殉したる生涯であつた。此の一事丈は、彼の敵も、味方も、恐らくは異議はあるまい。

接觸は第一次桂内閣以來

予は彼の舊友でもなく、親友でもなく、又た嚴正なる意味に於ての、政友でもない。予は少年の頃、彼の故郷宮之城に遊んだことがあるから、夙に該地の出身者に、大浦某あることを聞いて居た。併し彼と接觸するに至つたのは、明治三十四年、第一次桂内閣以來の事だ。

書を與にす可き人

予は白狀する、出來得る限り、彼と交際するを好まなかつた。其の理由は語る迄もない、彼は當時に於て、既に法性寺入道以上に、種々の惡名、醜名を、其の姓名の上に冠せられて居たからだ。然も一見して、寧ろ相知るの晩きを恨んだ。そは見る所は、聞く所と、全く相違して居るからであつた。予は彼を見て、大浦は與に虎狩に行く可き一人だと思うた。此の觀察は、大正七年の今日に至る迄、毫も予を裏切らなかつた。樂を與にす可き彼であるや、否やは、遂ひに試みたことがない。されど苦を與にする彼であることは、予も實驗者の一人として、茲に明かに彼の柩の前に立て、證明することができる。

敵としては畏る可き人

彼は味方として賴母敷丈に、敵としては畏る可きであつた。人は兩全なることが、絕對的不可能でない迄も、極めて困難である。彼程味方に親切であれば、敵に對して寬大、公平を要求するは、恐らくは無理の註文であらう。されば均しく一個の大浦でも、友の見たる大浦と、敵の見たる大浦とが、全然異種、異類、別性、別格の人物であつたのは、毫も不思議はない。然も如何なる敵でも、一たび手を握りて友となれば、彼を親信するを禁じ得ないのである。

大隈侯の大浦評

大隈侯が、親しく予に語られたる所によれば、從來大浦なる者は、陰險、狡猾、

惡辣、慘忍の奸物と聞いて居た。然るに一たび閣僚となつて見れば、彼程忠實、誠慤、恭謹、勤勉なる者はない。彼は協同生活の中にて、最も我を張らぬ一人であり、己を捨てゝ公に殉する精神の、極めて旺盛なる一人であり、予が卽今最も信賴しつゝある一人であると。此話は大正四年六七月の交であつて、予は今ま侯の言葉其儘を記憶して居らぬが、其の意味は、確かに如上の通りであつたと覺えて居る。

持つ可き者は友人の一句

併し此れは大隈侯のみでなく、何人でも此通りであらうと信ずる。世間大浦君を惡黨の標本と思ふ者も、一たび彼に接見したらば、少くとも十中の七八迄は、其の友人となり、左なくも彼に對する惡感を、一掃したであらう。持つ可き者は友人であるとの一句は、總ての朋友に適用す可きや、否やは、姑く措き、彼に對しては、正しく眞理である。

諸惡の請負屋

彼が同人間に、調法がられたのは、彼が自から甘んじて、諸惡請負屋となつたからだ。予が同人間と云ふは、廣義に諒解して貰ひたい。先輩、同輩、後輩を一貫しての意味である。上は山縣老公より、下は地方の無名氏までも、此中に含蓄して居る。如何なる團體にも、衆善奉行者は、澤山ある。されど諸惡請負屋は、概ね絕無だ。左なくば僅有だ。彼は何時でも自から下手人であると、名乘り出た。

大浦は拂溜の御用

桂公は彼を鬪犬（ブルドッグ）に喩へた。此れも間違はない。併し予は桂公に云うた、如何なる家にも無くて叶はぬ物は、掃溜である。誰でも床間の置物となるを厭はぬ、併し掃溜の御用を勤むる者は、一人もない。然るに大浦は平氣で之を勤め、寧ろ勇み進んで之を勤むる。所謂る仲間の最も好まぬ用事は、何でも一手に引き受くるは、彼の本領で、且つ自から誇りとする所ではあるまい乎と。桂公も首肯した。

政友會の切崩し

予は手近き一例を擧げよう、明治三十六年の春、大浦君は頻りに政友會の、切

崩しをやつた。伊藤公は烈火の如く瞋りて、此が爲めに桂公との妥協も、殆んど成立の中途に於て、破裂せんとした。然も桂公は、自から關知せざる事とし、伊藤公に陳謝して、稍く其場を繕ひ、手拍となつた。

大浦君と伊藤公

必らずしも此のみが、原因でもなかつたらう。されど凡そ世の中に、大浦君程、伊藤公の覺え愛出度くなかつた者はあるまい。日露戰役の論功行賞の際にも、大浦君は子爵たる可きであつたが、伊藤公の意見で、男爵止りとなつた。後に子爵となつたのは、條約改正完成の功であつたと聞いて居る。右の事實は、何れにもせよ、寬大なる伊藤公、瀟洒たる伊藤公、磊落なる伊藤公が、大浦君を好まなかつた事は間違ない。大浦君も亦た、伊藤公の崇拜者ではなかつた樣だ。而して大浦君は、伊藤公より憎まれて居たことを、寧ろ自から愉快として居た樣であつた。愉快か、不愉快かは別として、天下の大政治家伊藤公の、忌憎の標的となつたことは、當人に取りては、決して不名譽とは思はれまい。

敵愾心の猛烈

大浦君の敵愾心の、猛烈であつたことは、其の溫容和貌、恭言謙行のみを見た者には、とても想像は及ぶまい。桂公の所謂る鬪犬も、尙ほ若かざるの趣があつた。此の敵愾心が、實に彼の取柄であつた。或は其の生命の、半ば以上であつたとも云ひ得る。

政友會とは犬と猿

大浦君と、政友會とは、如何なる宿因乎、全く犬と猿であつた。桂內閣が、政友會と妥協の際にも、政友會は恒に大浦方面を、警戒區域とした。弱者をいぢめるは、彼の好む所でなかつた。されど苟も敵を見れば、彼の戰鬪的熱血は、乍ち沸騰點に上つた。何時も政友會に對して、それであつた。而して大正四年三月二十五日、內務大臣として總選擧を行ひ、政友會に大打擊を加へたのが、彼の最後の勝利であつた。

敵には打擊味方には獻身

歡樂極まりて哀情多く、僅かに四個月の後には、政友會の爲めに、見事に仇を打たれて、失脚し去つた。卽ち彼は、大隈內閣の下手人として、其罪を引受けた

のだ。敵には打擊、味方には献身、此れが彼の一生の二大本領であつた。而して此れが爲めに、彼は大正四年七月三十日、勝利の絶頂に立て、生きながら葬られ去つた。

政界を離れた大浦

政界を離れた大浦は、水を離れた水虎だ。彼は政治專門屋だ、政治以外には何等の趣味も、嗜好も、道樂もなかつた。然るに彼は政界を離れて、未だ一言も怨詞を放たず、半句も愚痴を滾さず。翼を戢め、影を藏し。平生虛弱なりし身體は、追々と肥滿し。其の蒼白き顏色さへ、此頃は光澤が出て、其の落ちたる頰さへも肉附き。從容自適、如何にも樂隱居らしく見えた。

晩節の退藏と強き意志

予は彼が政界に於ける奮鬪よりも、其の晩節の退藏を見て、眞に彼が剛腸男兒であつたことを、明らかにし、寧ろより多く、彼を尊敬する心を起した。彼の內心は兎も角も、傍人の目には、天をも尤めず、人をも怨まず、仁を求めて、仁を得たりの、風情があつた。此れは一通りや、二通りの修練や、克己では出來ることではない。彼は實に鬼神をも驚かす可き、强き意志の持主であつた。

不思議なる矛盾性

彼には不思議なる、矛盾性があつた。新聞や、雜誌に揭げたる、一行二行の記事にさへ、神經を惱ますかと思へば、天下を敵としても、平氣である度胸があつた。或は盲者蛇を怖れずの類である乎、否々、決して然らずだ。彼は神經過敏でもあり、又た勇氣過多でもあつた。彼は非常なる潔癖家であつたが、又た政治上には、醜惡の何物たるを解せぬ程の、無頓著漢であつた。彼の政治的信條には、目的は手段を撰まずとの一項があつた。彼が飛び拔けたる働きも、此の信條の爲めであつたが、其の失脚も亦た、此が爲めであつた。併し其の目的や、決して一人一個の爲めでなかつた。彼が所謂る國利、民福と信ずる爲めであつた。

信條と目的手段

金錢よりも政治

彼の手が金錢に潔白であつたや、否やは予の知る所ではない。併し彼は右の手に取れば、左の手に散じた。彼は薩人に似氣なく、金錢を贏くる術に疎であつ

た。又た金錢に執著する心が、寧ろ淡泊であつた。假りに彼が金錢を得るに、手段を撰まなかつたことがありとすれば、それは彼一個の爲めでなく、彼の黨類の爲めであつた。黨類を周給するは、天下に對する御奉公であると、彼は確信したからであつた。彼は金錢を愛するよりも、政治を愛した。政治の爲めには、其の一身さへも投じた、況んや金錢をやだ。彼は實に政治と情死した。政治を副業となし、政治を金贏けの方便となすが如きは、彼の夢にだも想はぬ所であつた。此の一點に於ては、彼も亦た、正しく國士の一人であつた。

政治と情死

理想的紳士

彼は殆んど理想的紳士であつた。其の品行は方正で、行儀は謹嚴で、上にも、下にも、仲間にも、當りが善く。而して清素に、質實に、且つ頗る規帳面であつた。世の中に約束をして、其事の細大を問はず、彼程當てになる者も少いと思はれた。

不言實行

彼は實行家であつた、不言實行とは、彼の事だ。理想、經綸は勿論、思慮、分別も豐富ではなかつた。彼は智者と云はんよりも、策士であつた、策士と云はんよりも、鬪士であつた。彼は常識に饒んで居た。人に接し、事に處するに妙であつた。才と、氣と、勇とは、寧ろ贅澤過ぎる程であつた。智と、明と、學と、識とは、彼の長所でもなく、强點でもなかつた。

鬪士

否な奇才

予の心眼に映ずる彼は、英雄よりも寧ろ才子であつた。否な奇才であつた。但だ其才や重厚にして、輕薄でなかつた。然り輕薄の分子は、痕跡だもなかつた。恩仇は彼に於て、頗る分明であつた。他人の一寸の好意は、必ず一尺にして之を酬いた。

勤王愛國の精神

要するに彼に取る可きは、其の金石亦透る意志であつた。而して其の意志や、强慾非常の意志でなく、主我執拗の意志でなく、忠愛の性情を加味し、熱情淋漓たる意志であつた。彼の一生を貫徹するは、勤王愛國の精神であつた。彼が如何なる境遇にあるも、此の大主腦丈は、決して狂はなかつた。彼が始終山縣

老公の眷遇を享けたるも、此の大主腦あるからと思ふ。

予等同人の祈願

予は今彼の柩前に、通夜する代りに、感慨の餘、此文を綴つた。正直に云へば、彼を政治的には兎も角も、せめて社會的に再生、復活せしめんとは、予等同人の祈願であつた。然るに埋れた儘に、彼が長逝したのは、眞に遺憾だ。彼自身が其の運命を、殊勝に、大人なしく、恭敬に、忍受して、甘受して、之に安著したるが如き情態を、目擊したる者には、彼に向つて此の問題を提起するは、餘りに無情らしく思はれた。

悲慘の極は沈默

實に悲慘の極は、沈默であり、沈默の極は悲慘である。彼は我等の爲めに、幾許の友情を傾倒した。然も我等は彼の爲めに、此の最後の、而して此の最少の希望さへも、達し得なかつた。扨も殘念の事よ。彼は我等の爲めに、極めて當てになる友人であつた。然も我等は彼の爲めに、何事をも爲し得なかつた。悔恨と云はん乎、嘆惜と云はん乎。

亦た奇しき因緣

今回の政變に際して、政友會の或者等は、尙ほ鎌倉の大浦が、何事をか目論見（もくろむ）であらうと畏れた。所謂る死せる大浦、活ける政友會を走らせんとした。然るに政友會內閣の成立したる翌日、彼は溢焉として逝いた。是亦た奇しき因緣ではあるまい乎。

哀悼の涙と生涯の淨化

彼の訃に接して、一息嘘く者も少くあるまい。併し涙を流す者も亦た、甚だ多いと思ふ。而して是れは彼に對する、感謝の涙であり、追懷の涙であり、嘆惜の涙であり、同情の涙である。卽ち何等求むる所なき淸淨、無垢なる涙である。彼の七十年に垂んとする、戰鬪的生涯も、此涙で平和の間に、久遠に淨化せらるゝであらう。（大正七年十月二日）

原敬君

一寸先さは暗の世

信州、甲州、駿州の探秋色旅行を終へ、東京より逗子野史亭に還りて、僅かに三時間以内に、原敬君罹難の電話に接した。一寸先は暗の世とは、全く此事だ。

舊く久しき面識

予は原君とは、何等深交はない。併し面識から云へば、舊く久しき面識だ。君が陸奥宗光君の下に、農商務大臣秘書官たりし、明治二十三年頃よりの事だ。爾來君の公的生涯には、予は新聞記者として、少からぬ注意を拂うてゐた。君は正しく陸奥君に見出された、君は陸奥大學の優等卒業生とも云ふ可き一人だ、否な恐らくは其の唯一人であらう。

強情我慢は本來の持前

君は南部に於ける名門の子弟であつた。南部の鼻曲り鮭とて、其の強情、我慢は、本來の持前であつた。併し少年時代より餓鬼大將の氣分が饒くて、死に抵る迄、それで始終した。君が多くの敵あると共に、多くの味方のあつたのは、畢竟此れが爲めだ。

近來稀有の政治家

君は政治家的天分過多にして、經世家的天分過少であつた。此の一點に於ては、君の先輩陸奥君とは、大なる相違がある。陸奥君は多くの缺點あつたに拘らず、尙ほ是れ經綸の才であつた。君には國家の大經綸と云ふが如きものは、不幸にして是れなかつた。併し政治家としては、近來稀有の雄材であつた。

現實家―現在あるのみ

君は理想家でなく、現實家であつた。君には過去もなく、將來もなく、只だ現在のみであつた。世界の公人中、恐らくは君の如く、今日主義に徹底したものはあるまい。君には過去の煩悶もなく、將來の取越苦勞もなかつた。但だ當面の問題を、さら〳〵解決して行けば、それで澤山であつた。而してそれが亦た非常に鮮かな手腕にて解決せられた。それも其の筈だ。何となれば一切拘泥する所なく、只だ當座々々の出來得る丈けの事を、出來したに過ぎなかつたからだ。併し此れは尋常一樣の政治家の階子かけても、企て及ぶ所でなかつた。

政友會總裁としての原君

原君は時々刻々變化した、然も政治家として見れば、退化でなく、進化であつた。凡そ政友會總裁としての原君程、其の威信の黨内に徹底した者はあるまい。

第一世總裁の伊藤公よりも、第二世總裁の西園寺公よりも、第三世の原君が、始めて名實兩ながら總裁たるの推戴、畏愛を、其の黨員の殆んど總ての者より贏ち得た。此れは如何に割引しても、原君の美德と云ふ能はずんば、美點と云ふ可きであらう。そは何故である乎。

一切の責任に當る

（第一）は自から一切責任の衝に當つたからだ。富と貴とは、卿等の取るに任す。難題と面倒とは、乃公に一任せよとは、原君が其の同僚に對する態度であつた。

第一の勉強家と先登者

（第二）は總ての黨員を通じて、原君が第一の勉強家であつた。勿論黨務に就ての勉強家であつた。政友會は、決して座上空談の政黨でない。此の一點に就ては、如何に政友會が横暴でも、腐敗でも、識認せねばならぬ。然るに其の活動的政黨中に於て、最大活動家は、原君であつた。原君は未だ曾て黨員に向つて行けと云つた事はない。彼は只だ來れと云うた。如何なる難戰、惡戰、混戰の場合でも、君は全軍の第一先登者であつた。

多量の戰鬪力と勇氣

（第三）は君が多量なる戰鬪力と、更らにより多量なる勇氣を具有したる事だ。君は決して觀兵式の大將軍ではなかつた。君は或る意味に於ては、戰鬪の爲めに戰鬪を好むの性僻さへあつた。君は如何なる强敵に遭ふも、決して却退せざるのみならず、必らず逆襲を試みた。萬一却退の止む可からざる場合にも、背奔せずして、前走した。

政治一點張の凝注力

（第四）は君が凝注力だ。君には技藝とか、文學とか、宗教とか、哲學とか、骨董とか、書畫とか、あらゆる道樂がなかつた。君は何時も政治一點張りであつた。約言すれば君は政治に淫した。されば其の黨員に接し、黨務を見るが如きは、苦痛なる義務でなく、愉快なる道樂であつた。云はゞ政治は君の生命であつた。

絕倫の精力と體力

（第五）は君の精力絕倫で、體力も之に比して、亦た絕倫であつた事だ。君の身

體は、堅牢なる蒸汽機關の如く、何時も汽力が充溢してゐた。君の體力は、殆んど君の意の儘に、何等の支障なく、遠慮なく使用せられた。而して君の精力は、宛も無盡藏の如く、如何なる場合にも、綽々乎として、遊刄餘りあつた。黨員の多くは、君に競爭の叶はぬは愚ろか、追隨して、奔り且つ僵れた。

一種の親分氣質

（第六）君には一種の親分氣質があつた。餓鬼大將でも、輕薄なる餓鬼大將もあれば、執着なる餓鬼大將もある。君は前者にあらずして、後者であつた。一たび君と、交を訂した者は、其の同輩と、後輩とに拘らず、必らず一旦緩急あれば、君に俟つ所があつた。而して君も亦た、必らず之に酬いた。若し君が大なる汚點を、我が憲政史上に殘したことありとせば、その理由の一半は、之に存する。

當てになる政治家

（第七）君は公私、兩ながら當てになる政治家であつた。此の一點に於ては、前に星亨あり、後に原敬ありと云ふ可きであらう。曾て山縣公が、星を當てになる人物として、取り扱うた如く、桂公も亦た、君を當てになる人物として、取り扱うた。君は取引には、決して甘くなかつた、否な頗る辛くあつた。併し一たび確定すれば、決して漫りに之を渝へなかつた。然諾の一事にかけては、君は其の先輩陸奥伯よりも、寧ろ大いに當てにす可き一人であつた。

政治的權力と金錢の價値

（第八）君は政治上に於ける、金錢の價値を、極めて能く諒解した一人であつたが。さりながら君自から金持となる可く、金贏けに齷齪しなかつた。君の立場として、自から富者とならんと欲せば、如何なる富者とも、なり得たであらう。然も君の大望は、政治的權力であつて、富ではなかつた。即ち政治的權力もて、天下の富を左右するは、君の愉快の一であつたが、然も自から天下の富豪となるの野心は、毛頭是れなかつた。即ち君は個人としては、寧ろ營利に淡泊であつた。

理智に勝つて頭腦明晰

（第九）君は理智に勝ちて、頭腦明晰であつた。此れと同時に、斷ず可きに斷

じ、決す可きに決した。君は自からの前程を、他人に向つて、尋ねる程の悠長漢でなかつた。卽ち吾が行程は、吾自から之を測定した。併し其の周圍の事情や、其の背後の黨員の消息やも、極めて注意深く考慮して、決して猪突、妄進しなかつた。君は決して脫線しなかつた。此の意味に於て、君は最も安全なる政治家であつた。

逸を以て勞を待つ

（第十）君の强味は、爲すにあらずして、爲さゞるにあつた。君は大活動家たると同時に、決して自から進んで問題を、提起するが如き事を敢てしなかつた。君は何時も不敗の地を占めて、他の來るを待ち設けた。逸を以て勞を待つとは、是れ君の政治的六韜三略中の第一義諦であつた。新たなる提案を以て、天下を忙殺するが如きは、打算的なる君に於ては、餘りに莫迦らしくて成すを屑としなかつた。君は唯だ四圍の要求に餘儀なくせられたる場合、其の最も行はれ易きものを、取り上げて、之を行うた。されば君の仕事は、概して勞少くして功多かつた。

黨派に殉じたるが遺憾

以上は君に就て、記者が平昔觀察したる一斑だ。君が唯一無二の政友會總裁たる所以、職として此に存した。併し此の十個の美點（？）の裏面には、亦たそれ丈の短所あることは、當然だ、必然だ。記者は返すゞも君程の人物にして、國家に殉せずして、黨派に殉じたるを遺憾とする。併し君は近古我が東北の產したる超卓の人物だ。平生政友會に對して、親交なき吾人も、我が日本人として、君を其の誇りの一人とするに、異存はない。而して此の意味に於て、君の死を深く嘆惜する。（大正十年十一月五日午前九時　逗子野史亭に於て）

京城にて祭文起草

桂公の三周忌

大正四年十月十日は、東京三田桂邸に於て、桂公三周忌法要あり。予は心竊か

に之に參列せんことを期したりしが、人事多くは意表の外に出で、却て友人の喪に奔り、遙かに京城に於て、此の祭文を草することとはなりぬ。但だ公の靈若し知るあらば、予の不遜を咎めざる可し。

明治下半期政界の大立者

桂公は明治の下半期に於ける、主なる政界の大立者にてありき。其の勳業の崇且つ大なる、帝國發展の歴史之を證明す。但だ喬木風多く、高明神の惡(にくみ)に逼る。其の晩節に於て、公が衆難群謗の焦點となりしもの、偶ま以て公の功績の天下に赫々たるを反襯するに足る、豈に公の德を累はすに足らん哉。

洵に一代の大政治家

然りと雖も公も亦た人也、凡そ人として弱點なきはなく、過失なきはなし。吾人豈に敢て公に向つてのみ、其の完全、無缺を責めんや。但だ公の如きは、如何に其の功過を乘除するも、洵に一代の大政治家にして、且つ一世の人物たるを辱しめざりし也。其の識甚だ高からざるも、其の見る所、正鵠を誤らず。其の膽甚だ豪ならざるも、其の容るゝ所、頗る大也。其の衆智を集め、群材を合し、之を一定の目的に向つて導くの伎倆に至りては、殆んど公に於て、獨得の擅場たりしが如し。

今日の天下と故公

今日の天下、必らずしも人才なきを憂へず、唯だ公の如き國家の大事に際して、天下の大勢に順應する、綜合的經世家を少くのみ。逝者復た追ふ可からず。吾人何んぞ今日に於て、公にのみ執著せんや。然も世界大變局の大機に於て、徒らに黨爭を事とし、國家の大經大綸を閑却するもの、未だ今日の如く、甚しきはなし。區々の內訌、却て千載一遇の好機を逸す。公の靈にして知るあらば、それ之を何とか謂はむ。

公の成功は不朽の業

從來公を詛うたる者、公を誤解したる者、公を正面の政敵としたる者、尙ほ今日に於て、公にして世にあらばと、太息、追懷するものあり。此を以て知る、公の失敗は、一時の事にして、公の成功は、不朽の業たりしことを。予豈に克く公を知るものならんや。但だ曾て公の知遇を忝うし、中情耿々、遺れんと欲し

て能はず。玆に蕪辭を綴りて、公の靈位に告ぐ。（大正四年十月）

井上友一君を悼む

訃報に驚く

今朝新聞を讀み、驚いたのは井上東京府知事友一君の永眠の報であつた。實は國民新聞のみを見たる時には、何かの間違ではなからうかと疑うた。されど事實は間違なき事實である。

善良の役人と君の希望

予は井上君とは、別段の交渉を持たなかつた。されど明治三十年頃より面識であつた。而して君が日本政府の役人として、最善と云ふ能はずんば、少くとも善良の役人である事を、熟知した。君は決して刀筆の吏を以て、自から滿足せなかつた。君の心は活ける社會にあつた。國本を培養し、國俗を淳厚にし、雄大なる國家と與に、正善なる國家たらしむるは、君の希望であつた。君の管内の東京府のみと云はず、全國に於ける町村の子弟、父老は、皆な君の友愛視する所であつた。

病中に君の來翰

予は二月十六日以來、病に臥し、六月十日を以て、始めて家に還り、常務の若干に服するを得た。されば其間に於ける、一切の書信、其他案上に堆積して、殆んど手の著け樣がない。今ま井上君の訃を聞くや、否や、其の中より、左の一書を抽讀した。是れ實に井上君の書簡である。

御北堂樣突然御逝去

肅啓。賢臺近頃二豎の爲め勝れざる御樣子に候折柄、御北堂樣突然御逝去被レ爲レ遊、御高齡とは乍レ申、多年庭闈之御薫陶尋常に無レ之、永く御孝養を享けさせらるゝ御事と奉レ存候處。意外之御事にて、御哀傷の至り、御同情申上候。小生は慈母を喪ひたる近き實驗より申上候得者、一家團欒の歡喜を缺きたる寂寞、何に喩へん樣も無レ之、殊に曩に賢大人御永眠に尋で、此の凶事有レ之、生者必滅、會者定離と申しながら、無上の恨事に御座候。過日汽

車中にて、御面會之節、名門之俊髦、淑女雲の如く、永遠の福德を全うせらるべきは、當然の儀と申上居り候に、豈計らんや、茲に訃音に接せんとは、誠に夢寐の心地せられ、不二取敢一弔詞申上候。匆々敬具。

誠に夢寐の心地

己未二月　井上友一

德富蘇峰先生　梧右

逗子灣頭鎖二晚霞一。春山如レ睡夕陽斜。瑤池王母上レ雲去。不レ見仙姿映二碧波一。

是政

一讀して感無窮

予は之を一讀して、感極りて殆んど言ふ所を知らなかつた。人生實に朝露の如し。君の死は、吾人揔ての者に於て、意外なりし如く、君に於ても、意外であつたらう。君の所謂る夢寐の心地とは、予が現在の心地である。予は今ま多く語る能はず。但だ若し明治大正の史を編する者あらば、君や循吏傳中の一人たる事、斷じて疑を容れぬと信ずるものである。君の予に與へたる書簡は、今となりては、直ちに予が君の靈位に向つて、諗げねばならぬ文句となつた。思へば、人間の一寸先は、全く暗黑である。返すがへすも公の爲めには、此の善良なる好官人を失ひ、私の爲めには、此の敎養ある、善美なる紳士を喪うたるを、悼まざるを得ない。（大正八年六月十二日午前十一時　青山艸堂に於て）

循吏傳中の一人

愛山山路彌吉君

人生無常の活教育

昨日迄把臂談笑したる、愛山山路彌吉君は、今や倏然として、幽界に去れり。吾人は君の長逝を嘆惜するに先ち、轉た人生無常の活教育を、眼前に驗したるに、驚かざらんと欲するも能はざる也。自から萬物の靈長を以て誇りとする人間も、寸前暗黑、朝以て夕を卜する能はず。逝者自から知らず、周圍の者、亦た固より知らず。嗚呼人の死生は、果して素定の命運なる耶、否耶。

約三十年間の耐久朋

記者は鎭西の田舍漢にして、愛山君は舊幕士人の子也。我等兩人は、輿に竹馬に跨り、俱に紙鳶を颺げ、互に手を携へて鄕校に來往したる、因緣なかりし也。されど顧み來れば、我等兩人は、約三十年間の耐久朋也。今日に於て、君に就て語る可き義務は、記者の到底避くる能はざる所也。而して是復た君の志を成す所以たらずんばあらざる也。君が明治二十年、靜岡より始めて書翰を東京なる予に投じてより以來、大正六年死床に、予の手を握りて、最後の息を引き取る際迄、予を以て輿に議す可き一人となせり。是れ予が胸中、今や亂れて絲の如きに拘らず、彊めて自から本文を艸する所以也。其言の倫次なき、亦た已むを得ざる也。

輿に議すべき一人

山路君の家系

山路君は、享保、安永の際に於ける、數學の大家にして、明和年間、幕府の天文家に擢任せられたる、山路彌左衞門主住の裔也。爾來彼の家は天文方を襲任し、其父に至れり。而して君は實に此の科學的知識の血液を、流傳したると輿に、亦た幕府の瓦解と輿に、精神的、生活的に、異常の影響を被れり。君は江戸に生れ、靜岡に成長せり。而して靜岡に於ける君は、實に一般の失敗者の例に漏れず、否な其の水平以下なる困苦を嘗めたり。蓋し君は幼にして母を喪ひ、祖母に鞠養せられ、而して君の父は、君及び其の一家の爲めに、自から不幸の因

少時の困苦と君の一生

を作したれば也。惟ふに君が反撥的傾向、戰鬪的氣象、而して其の必然の結果たる自助的精神は、地に落ちてより以來、自から人事の何物なるを解せざる以前、業に已に其の根蔕を、君の方寸に措きしならむ。而して是れ實に君の一生を、一貫したる大動力たりし也。

自養且つ家を養ふ

君は自助の人也。君は幼にして家より養はれずして、自から養ひ、且つ家を養ふ可き窮地に擠されたり。君の少時を知る者は、君が酒僻あり、放縱なる父に、孝順なりしを稱せざるはなし。君は自ら靜岡縣警察の雇吏となりて、以て身を支へ、且つ家を支へたり。然も君の敏にして學を好むや、其の餘力を以て修めたる學問は、當時に於て、已に儕輩を壓したり。明治二十二年、君が東京に遊學し、爾後遠州袋井驛に傳道の事に從ふや、獨學自得、其の文章は已に天下の有眼者をして、注意せしめたり。明治二十五年、雜誌『護教』の主筆となり、國民新聞記者となるや、天下君を認めて、文壇の飛將軍となせり。若し個人に就て求めば、君の師承する者もあらむ、君を啓發したる者もあらむ、或は君を感化したる者もあらむ。然も之を概言すれば、君は己を以て己の師となせり。君は本來無一物也。學閥あるにあらず、藩閥あるにあらず、金閥あるにあらず。否な總て是等の障碍を排して、其の運命を開拓せり。中村敬宇翁の自助論は、君に於て其の活ける標本を見たり。君は實に自助論中の活模型の一人也。

文壇の飛將軍

文章に於て一個の天才

君は文章に於て、一個の天才たり。君を文壇の勢力として、天下に紹介したる『新井白石』、『荻生徂徠』、若しくは賴山陽に關する諸論文、及び『讀史論集』の如き、何れも二十七八年役前の著作也。是等は往々其の獨斷的、若しくは速了的錯誤あるに拘らず、概して其の意見の老成にして、其の文字の快利なる、乃ち反對者と雖も、之を敬重し、且つ之を愛讀するを禁ずる能はざらしめたり。

鼎軒と君の史論

當時史論の先唱者としては、田口鼎軒ありしと雖も、君は決して鼎軒の後塵を拜する者にあらず。君は鼎軒の動もすれば、閑却せんとする個人性に重きを措

き、歴史は境遇と、人物との合持ちたる眞相を、闡明するに於て、最も勗めたり。而して君の史論は、人物に對する同情と、熱情とに於て、鼎軒を凌げり。是れ君の史論の、卓然として一家を成したる所以の、一たらずんばあらず。

君の史才と史識

古人は史に於て、才、學、識の三長を說けり。君や學に於ては、必らずしも淵博と云ふ可からず。然も其の資料を、隨處に發見するの能と、之を縱橫に驅使するの才とに至りては、殆んど比類少く。而して其の史眼の敏捷にして、史識の透徹なる、時としては餘りに鑿空に失せずやと、疑はしむる程に擢揮せり。君は實に一葉落ちて、天下の秋を先知したり。塵片の流るゝ方向を見て、世界の潮勢を豫知したり。一隅を以て三隅を擧ぐるが如きは、君に於て實に尋常茶飯たりし也。而して吾人が君に敬服するは、其の想像力の精確、鮮明、豐富なりしこと是れ也。君が孔子を論じて、周代の生活狀態を說明するや、所謂る三面記事も、此の如く實際的なる能はざりし也。而して其の足利尊氏を論じ、德川

想像力の精確鮮明豐富

家康を說くや、現在の大隈、山縣を語るよりも、眼前に其の人物を接近せしめたり。君は實に古を以て、今となし、過去を以て、現在となすの、活手腕を有したり。而して君の文章は、此の想像力の上に出でたり。人は云ふ、書は言を盡さず、言は意を盡さずと。されど君は未だ嘗て盡さゞるの意なく、盡さゞるの言なし。意の至る所、筆之に隨ふのみならず、其の筆は殆んど意の達せざる所に達せり。君の文章は、議論、叙事相ひ錯綜する史論としては、硬軟、繁簡、思ふ所、悉く意の如くならざるはなし。而して其の氣焰の騰る所、渴虎澗に奔り、快劍陣を斫るの概あり。單に君の長技に就て云はん乎、乃ち天下無敵と云ふも、決して溢辭にあらざりし也。

天下無敵の文章

君が得意の一時代

若し君の得意の時代の一を數へば、明治三十二年より、日露戰役に至る迄、信濃毎日新聞主筆時代ならむ。君は大店の支配人よりも、小店の主人を以て、自から喜べり。所謂る餓鬼大將は、君の天性の嗜好たり。君の信州にあるや、隨

愛山山路彌吉君

處の有志者、青年と交驩し、其の講談を以て、其の演說を以て、居然たる一の勢力たりし也。而して此が爲めに、君は亦た文壇に於けるが如く、時としてはそれ以上に、講壇の飛將軍とはなりぬ。爾來君と信州人士との關係は、今日迄種々の方面に於て、繼續せられ。君が最後の病因も、本年二月信州に於ける、過度の講演に胚胎したりと云ふに至りては、君と信州とは、其の宿緣淺からざるものある也。君や口に信州人士を罵りつゝ、心に之を愛したり。知らず兩者の間、默契する所あり耶、否耶。兎も角も信州は、君に於て第二の故郷たりし也。

君と信州人士との關係

隱居放言多產豐作の時代

日露戰爭より現時に至る迄は、或は君の隱居放言時代と云ふを得可し。或は多產豐作の時代と云ふも、亦た妨げず。此間に於て、等身の著述は、其の『獨立評論』の刊行と與に出で來れり。吾人は今ま逐一之を歷擧するの煩に堪へず、乃ち代表的著作としては、先づ大正四年の夏刊行せられたる、『德川家康』を擧ぐ可し。而して其の時務的見識をトす可きものとしては、大正五年の冬刊行せられたる、『支那論』を擧ぐ可し。但だ吾人をして浩嘆已む能はざらしむるは、君が其の精力の過甚に任せ、餘りに多方面に亙りて其の筆を揮ひ、爲めに其の緊張、充實す可き著作をして、聊か潰蕩、放漫ならしめたるの一事也。然も君亦た自から見る所あり、過去四五年間に於て、『大日本國民史』の著述に著手したり。此書や君が天下後世に寄與す可き、一大精神の凝塊にして、記者の如きも亦た、其の必成を慫慂して、已まざりし一人也。此が爲めに其の資料は、宛も元遺山の野史亭に於けるが如く、君が澁谷の僑居に積みて、堆を成せり。而して、其の記する所、蠅頭の細字、他人辨識する能はず、唯だ君單り之を使用するを得るのみ。大正四年の夏、君が丹毒に罹りて、死に瀕するや、記者は、主治醫に向つて、せめて此書の完成する迄、存命せしむる方便はなきやと哀訴せり。而して今や斯る哀訴を繰り返すに遑あらず、溢焉として逝く。死者自ら憾みなしと云ふも、生者豈に憾みなからん乎、是れ實に終天の恨事也。君の絕筆

大日本國民史の著述に著手

是れ終天の恨事

と云ふ可きは、實に本紙に記載したる、『奠都五十年』の一文也。

獨自一己を主持

君や獨自一己を主持するに於て、幕人の共通性を有したり。君や雷同せず、詭隨せず、盲從せず。如何なる場合に於ても、一個の見識を持し、一個の身分を持し、未だ曾て他の團體に向つて、自我を沒入したる事あらず。されど亦た俠骨稜々、恒に弱者の味方たり、窮者の友たり、敗者の同情者たり。要するに君は大なる我儘者也、大なる氣隨者たり。されど他の主我的なるを好まざる如く、自らも亦た、決して主我的ならざりし也。他の利己的なるを嘉みせざりし如く、自らも亦た、利己的ならざりし也。君は寧ろ過失に近き程、友誼に篤かりし也。君は他の請託に對しては、殆んど一否字を口にする能はざりし程の、弱蟲たりし也。

七分の眞氣と三分の穉氣

君は要するに七分の俠氣、若しくは眞氣と、三分の衒氣、若しくは穉氣とを有したり。君が不羈、自恣の言行を敢てして、其の周圍に少からざる親友と、多くの隨喜者とを有したるは、其の才學、文章の超卓なるが爲めのみならず、眞に君が赤心ある、好男兒たるが爲めならずんばあらず。所謂る古今文士の嫉妬、排擠の習氣なるものは、君に於ては一點だも、之を見出す能はざりし也。君は善き意味に於ての江戸兒也。而して他の江戸兒の企て及ばざる、溫かなる血性を有したりし也。

天才肌の常識家

君は天才肌也、然も常識あり。君は常識あり、然も天才肌也。君外は疎放にして、內は實に縝密、大膽の硬皮に裹むに、翼々たる細心を以てす。人或は君の脫線的言行を危むも、君や未だ曾て一回も脫線せざりし也。君や自から行く可き所を知り、併せて止まる所を知れり。君が三十年間、縱論、橫議を逞くして、未だ言禍に罹らざる所以のものは、其の止まる所を知れば也。君は未だ騎虎の勢に乘じたることなく、又た恐らくは乘ぜられたることなけむ。君は他人に先ちて驀進するも、他人が盲目的に突擊する際には、君は兩眼を撥して、其の危險區域の外に立てり。君が世に處する、決して智ならずと云ふ可からず。但だ若し

世に處する智

君にして、今少しく自ら愛重する所以を解し、今少しく其の精力を集中して、其の一大目的に向つて、之を傾注したらんには、其の成功は、恐らく倍するものありしならむ。然も是れ唯だ備らんことを賢者に求むるの言のみ。豈に肯て深く君を咎めん哉。

青天白日的の性行

君身長中人を出でず。而して魁貌胖軀、其の容顏粗獷なるが如きも、實に一種の愛嬌あり。口を開けば音吐鐘の如く、直ちに他をして、其の青天白日的性行の男兒たるを、解得せしむ。人と交る淡泊にして率易、毫も邊幅を飾らず。親疎、上下の差別なく、直ちに肝膽を輸す。其の一たび交るや、自ら渝らず。他の過を咎むるに寛に、自から過を謝するに急也。君は往々過激の言を吐くも、未だ曾て深刻、忌克を失せず。君は恒に溫血にして、時として熱血となり得るも、未だ嘗て一滴の冷血をも、君の血管中に見出す能はざりし也。君には感激性あり、君には同情心あり、君の涙膜には、恒に不盡の涙泉を湛へたり。君は能く

徹上徹下陽性的の快活男兒

怒り、能く憤れり。されど未だ曾て一點、人に向つて、怨讐の念を挿みたることあらず。君の人を攻擊するや、棍棒にて、當面より一擊を加ふるの類にして、未だ利刄を以て、背後より刺すが如き事あらず。君は徹上徹下、陽性的快活男兒也。

無頓著たるべく頓著

君にして若し趣味ありとせば、そは平民的趣味也。君は實に無頓著なるのみならず、無頓著を以て、自から誇りとなせり。極言すれば、君は無頓著なる可く、頓著したりと云ふも可也。所謂る三分の衒氣、若しくは穉氣とは、是れ此を意味す。君品行端嚴、足未だ一歩も、暗黑の地を蹈まず、口未だ一杯も、酒類を嘗めず。其の外に出ては、侃々、諤々の好論客も、家に在りては、唯々諾々の好家爺たり。伉儷尤も敦く、子女皆な君を友視す。其の趣味は、明眸皓齒にあらず、富貴利達にあらず、金錢田產にあらず、又た必らずしも詩歌にあらず、必らずしも書畫、骨董の類にあらず。唯だ饑れば大椀飯を喫し、飽けば肱を曲

其の趣味

讀書と談話と散歩

げて眠り、起居坐臥、手未だ嘗て卷を措かざりし也。而して讀書以外の快興は、恐らくは談話と、散歩たりしならむ。君が書卷を披きつゝ、野塘の間を逍遙緩歩する東京近郊は、君に於て殆んど天國に亞ぐの、樂園たりし也。

予が家は短命の血統

君や平生人に向つて曰く、予が家は短命の血統也、予も亦た長生せじと。其の一昨年丹毒を病むや、君自から一死を期せり。而して僥倖にも再生したり。君や生死關頭を往來して、深く自得する所ありしに似たり。君が今回の死は、其の病の爲めなるも、實は治療の手後れの爲めとは、醫師の言明したる所也。君や家人を制止して、强ひて醫を招くを禁じ、家人の之を聞かずして、招くや、事既に晩かりし也。然も君や自ら死期の迫るを知るや、泰然として傍人に語げて曰く、一死亦た快矣、予亦た憾む所なしと。而して醫師に向つて曰く、何を以て生死の分堺を知るを得る乎と。更らに筆を搦りて、一首を記して曰く、

一死亦快

辭世の歌

這娑婆はとても去られぬ世なれども
生れぬさきの國へ行かなむ

と。是れ實に死に先つ一時間前也。而して其の死に瀕するや曰く、『此より明治天皇の御國に赴かむ』と。生時元氣潑剌たる好男兒は、其の死期に際して、一層見上げたる好男兒として逝けり。生死關頭の專門大博士たる、禪學の諸先達も、此の如き立派なる末期は、恐らくは容易の業にあらざりしならむ。吾人は愛山君平昔修養の、傍人の覗ひ知る能はざる以上に、透徹したる所以を、此の一大事に於て、見知するを得、悲嘆の中にも、新たなる獲物を拾得して、自から胸中の欣樂を、覺えずんばあらず。君や實に短命也、元治元年十二月廿六日生れ、大正六年三月十五日死す。されど君の平生私淑したる賴山陽の、五十三歳にして逝きしに比すれば、更に一年を長くせり。君の大著述の未定稿の儘なるは、深惜に堪へざるも、其の從來の成績を擧げ來らば、君の五十四年の生活は、極めて意義多く、且つ有效なりしを疑ふ可からざる也。嗚呼君以て瞑す可

平昔修養の透徹

意義多く有効なりし生涯

き夫。（大正六年三月二十日）

熊谷直亮君と予

熊谷直亮君の遺言

熊谷直亮君逝く。君の親緣東郭落合君、其の遺言を齎らし、予に君の戒名を選定せんことを囑せらる。抑も戒名を命ずるは、僧侶の業にして、世俗人の任にあらず。然も予は誼に於て、良とに辭す可からざるものあり。

庸俗に卓越したる門地

君は元來津田亥年男と云へり。維新の際、熊本藩より出て、參與の職に就きたる津田山三郎―後信弘と云ふ―を父とし、明治の初期、米國に留學したる、鎭西の名士津田靜一を兄とし、其姉は元田東野翁の嗣子に嫁せり。君や生れながらにして、既に庸俗に卓越したる門地を占めたり。後熊谷家に入りて、其女に配す。女亦た貞淑を以て顯はる。君にして大成する無くんば、誰か能く大成せむ。而して事志と違ひ、遂に轗軻不遇を以て、一生を了したるは何ぞや。是れ豈に終天の恨事にあらずや。

君と相知るの初

明治十三年、予歳十八、東京より熊本に還るや、君は共立學舍に學べり。家淇水翁と、君の伯靜一氏とは、共に其の敎師たりき。予亦た學舍に往來し、君と相知るを得たり。當時君及び故戸田直清は、詩を以て同人間に推さる。予亦た聊か嗜む所あり、是を以て輪番詩會を催し、時に或は君等を、我が大江草舍に迎へたることもありき。

予と同甲

君は亥年男と稱し、予は猪一郎と呼ぶ。其名の示す如く、同甲たり。當年の予は、唯だ勝氣のみ多く、極めて貧相なる、皮と骨との青年にして、其の取柄は、書物虫と、理窟僻とのみ。君や然らず、豐頰秀眉、態度悠揚、青春の血氣淋漓として、四肢に漲る。而して多言せず、妄動せず。開豁にして齷齪たらず、眞率にして野鄙ならず。殆んど理想的の好青年と云ふ可かりし也。予は深く君と

理想的の好青年

交らざりしも、其の名家の子弟たると、而して君が、這般の好青年たるとの故を以て、恒に君を敬愛したり。

反對の立場―尋で上京

然るに明治十四年以來、熊本縣には―他地方よりも、特に甚だしく―政黨の分裂生じ、不幸にして予と君とは、互に反對の陣營に立つ可く、餘儀なくせられたり。爾來予は幾もなく家を擧げて東京に移住し、君に就て深く知る所なかりしも、君が國權黨側壯年組の領袖たりしことは、隱れなき事實にてありき。顧ふに明治十五六年より、明治二十二三年頃迄は、君が一生一代の花にてありしならむ。但だ其の美菓良實を、他日に結び得ざりしを、嘆惜するのみ。

意外なる出來事の爲に接觸

斯くて殆んど十年間沒交渉なりし君と、予とは、茲に意外なる出來事の爲めに、接觸したり。明治二十三年夏の頃と覺ゆ―卽ち我が『國民新聞』創刊の當年―何者の狡兒ぞ、我が『國民新聞』に向つて、九州の或る地方より、君の公人としての名譽を毀傷す可き電報を寄せ、而して當直の編輯員は、何氣なくその儘紙上に之を揭載したり。予は當時赤坂區榎坂町寓居の樓上にあり、『國民新聞』通讀の際、之を發見し、且つ驚き、且つ訝り、出社の上、其の出所を質さんと考慮し居たる際。

滝邊三山君と來社

君は故池邊君三山を伴ひ、案內を請ふや否や、驚飈の如く、階段に上り來れり。而して君が未だ口を開かざるに、予が未だ來意を問はざるに、否な互ひに寒喧の挨拶さへ交換せざるに。予の面を見るや否や、座に就くを待たず、三山は手を戟にして、予に逼るもの、如く、突如として、謝罪せよと絕叫したり。若し腕力を角せん乎、三山は魁梧の偉丈夫也、三山一人にても、予の敵には餘りあり、況んや君と兩人なるをや。予は一切の責任は、予が負ふ可きを語り、而して事實調査の上、無根ならば、熊谷君を滿足せしむ可き方法を取る可きを語れり。

當時の光景と草野麥丘君

當時の光景は、賴ひに過日吾社勤續三十年の彰表を受けたる草野君麥丘が、『國民之友』社說の口授を筆記す可く、次室に在りしが故に、傍觀し居たれば、若し其の記憶を辿らば、或は更に一段の奇談もあらん歟。

直接行動の勇者

熊谷君は本來辯論の士にあらず、寧ろ直接行動を以て聞えたる勇者也。兩君は心窃かに決する所ありて、予に來りし者に似たり。但だ柳に風の應接の爲めに、予は兩君の鐵拳見舞を免かれたりしを、僥倖とするのみ。然も予は此事よりして、熊谷君は固より、池邊君も亦た、愛す可き血性男兒たるを知るを得たり。此の如くして池邊君との交りも亦た、何となく興味を加へ來れり。

志を得ざりし所以

若し當然の順序よりすれば、熊谷君は第一期の衆議院議員たらざる迄も、二期以後は、熊本國權黨より選出せらる可かりし一人也。而して君が志を得ざりし所以は、抑も君の自から招きたる耶、將た他に理由ある耶。予は君が自から愛惜せざりし事を、悲しまざらんとするも能はず。何れにせよ君の生涯は、明治二十三年以後、漸く逆境に向ひたるが如し。

二十七八年役と君の軍事通信

明治二十七八年役に際し、君は通譯官として、軍に從へり。君は少壯支那に遊び、支那語に就て若干の知識ありき。予當時大本營の所在地廣島に在り、君と相見て久濶を叙せり。當時君意氣昂揚、劍を拔き地を斫るの概あり。予惟らく君にして軍人たらしめば、好個の飛將軍たらんと。予君に托するに『國民新聞』通信の事を以てせり。當時我が『國民新聞』の軍事通信員は、殆んど三十名に上りしも、其の最も人目を聳動せしめたるは、枕戈生の旅順攻擊、一老兵の太平山戰爭、及び國木田獨歩の愛弟通信にてありき。所謂る枕戈生は乃ち君にして、一老兵は、現時山陰日々新聞主筆梅田君又次郎也。

國民新聞通信員として京城に在留

三十七八年役、君亦た軍に從へり。而して亦た吾社の名譽通信員となれり。爾後君は朝鮮仁川に在りて、新聞に從事し、幾もなく國民新聞特派通信員として、京城に在留することゝなれり。伊藤統監は、國民新聞の京城通信が、動もすれば統監政治に反抗するを咎め、予に向つて屢ば其の不滿を語れり。予は熊谷君が既に老成人として、同人間に推重せらる可きを想ひ、是に於て君に托するに此任を以てし、伊藤公に語るに此の事を以てせり、公も亦た之を諒とせり。果然君

は京城通信員仲間より、老公の尊號を上られたりと云ふ。蓋し君亦た漸く老んとしたる也。

三十年を隔て交誼復昔

明治四十三年、予が故寺内伯の依頼によりて、京城日報を監督するや、屢ば京城に於て君と相ひ見るの機會を得たり。君は國民新聞通信員を兼ぬるに、京城日報の客員を以てし、予と君との關係は、茲に三十年を隔て、再び明治十三四年の昔を繰り返すこととなれり。

詩韵含英と大江逸の三字

予と君とは、時に或は相ひ唱和し、又た予は朝鮮諸老會宴の席上、君の作を乞ひ、之を懷にして、急場の責を塞がんとしたることさへありき。君偶ま韵書を予に徵す。予君に贈るに『詩韵含英』一部を以てす。標紙上『大江逸』の三字あり、君欣然として曰く、嗚呼大江逸と。大江逸とは、予が大江義塾に在る際の別稱なりき。蓋し此の書に對して、君が油然、舊情を惹き起したるや、知る可し。

契濶數年遂に久別

可爾後、予は京城日報との關係を斷ち、君は平壤民團長に推薦せられて去り、而して其の罷め、且つ病を抱いて東京に還るや、予亦た病の爲めに、久しく相見るを得ず。契濶數年、遂ひに久別となる。豈に悲しからずや。

戒名の囑と蘇峰生の事

惟ふに戒名の囑、寔に辭す可からざるもの、翌だに故人の意志を尊重するのみにあらず。予の蘇峰生と號するは、固より阿蘇山に因みたるも。正直に云へば、予は未だ一回だも阿蘇山に上りしことさへなく、唯だ曾て君が『十年心事蘇峰雪』と云ふ句を憶起し、當初疎放生と號したるを、後自から蘇峰生に改めたるのみ。

君の詩句と蘇峰の字

予が幼時村塾にあるや、同輩皆な予を粗暴家と呼べり。粗暴家とは讀んで字の如く、不整頓、無頓著漢の謂也。爾來自から警しむる所あり、疎放生と號せり。粗暴一轉して疎放となり、二轉して蘇峰となる。蘇峰の字、實に君の詩句に負ふ。今日に於て、予が君の爲めに戒名を選定するも、亦た偶然ならざるものゝ如し。

燒香合掌して戒名

乃ち恭しく香を燒き合掌して曰く、『忠誠院雄毅鐵城居士』、尙くは饗けよと。鐵城は君の生前の雅號也、雄毅は君の稟質にして、忠誠は君の理想也。君の精靈知るあらば、以て其意を得たりとせん耶、否耶。（大正九年十二月十六夕　湘南觀瀾亭に於て）

宗演老漢

宗演老漢遷化の報

十一月初日、秋雨蕭條の夕、獨り觀瀾亭に在り。何故たるを知らず、幽悶胸に塡る。乃ち坐右の陶集を把りて、彊めて自から慰めんとせり。寢に就き稍く睡らんとするや、乍ち電信の予を驚かすものあり。披らき來れば、宗演老漢の遷化を報じたる也。

一夜耿々不成眠

白狀すれば、此報や意外にはあらず。予は八月以來、老漢の病狀に就ては、屢ば一喜一憂したり。されど最近に至りては、寧ろ何時かは萬一の報に接す可く、豫期したり。乃ち豫期したるも、尙ほ今夕今時とは思はざりし也。予は遂に一夜耿々として睫を交ふる能はず、玆に十一月二日の曉、電燈の下、此文を綴る。語次第なし、唯だ予が所感を叙するのみ。豈敢て老漢を品隲すと謂はん哉。

予と老漢との訂交

予と老漢と方外の交を訂したるは、既に一昔の事。

十二月三十日（明治三十三年）逗子なる双親に、歲暮の祝儀を申上げんとて、二兒を拉して、午前靑山の僑居を出づ。……途次瑞鹿山圓覺寺の境內を見物す。等痕庭に印し、寂として人聲なし。刺を通じて、宗演師に面す。禪を學ばんが爲めにあらざる也。方丈の傍なる小室に對座し、茗を啜りて小話す。渾身の覇氣を、黃麻衣に裹むも、其の鋒鋩は、窪みたる眼窩の底より躍脫せんとす。師や三十歲未滿にして、早くも一山の貫首たりしを見れば、其の尋常の出家人にあらざるを知る可し。二十分ばかりにして辭し去る。（參照『第三天然と人』我閑日記）

老漢と最初の印象

是れ實に予が老漢に對する、最初の印象にてありき。其の對話の何事にてありし乎、茫として繹ぬ可からず。但だ老漢が當節流行の紙捲莨を、予に侑めたるを見て、心竊かに此の坊主は、頗る高襟(ハイカラ)だ哩と思うたるを想起するのみ。

故淇水老人及び老母と老漢

然も吾家と老漢とは、別に因緣のあるあり。故淇水老人は、予に先ちて老漢を知れり。老人は禪に參せざりしも、禪や、老莊や、其の本體の孔孟、程朱の道と共に、之を擇取せり。晩年基督敎を奉じたるも、老漢との交渉は、寧ろ敦きを加へたりしが如し。老龍庵に於ける、老人の書齋には、今尙ほ老漢の、特に老人の需に應じて書したる『潛種默耕』の額を揭げつゝあり。老人書籠中の忘機帖には、『虛明爽快』の文字あり。是皆な老人の心契したる所を誌したる也。

予一家との因緣

今春永眠したる予の老母も、熱心なる基督敎徒にてありつゝも、老漢に嚮往し、恒に予に向つて、老漢が道の爲めに、勇往邁進し、席暖かなるに遑あらざるを嘆美せり。予の家內、子女の如きも、亦た然り。此の如く予の一家と老漢とは、法緣以外の緣あるものに似たり。されば淇水老人の柩前に於て、老漢の讀經をも請へり、通夜の際に、其の法話をも請へり。老母の墓標をも、予の病んで書する能はざるが爲めに、老漢に請うて、之を書せり。是れ皆な父母の志に遵ふ所以なれば也。

交遊概れ老漢を環る

予が友人、野田大塊、將さに明日を以て、臺灣に其の未死の魂を埋めんとする明石柏蔭、阿部無佛、其他の數子、何れも老漢の會下に參せり。予は不肖にして、禪を會せず、又た老漢の鉗鎚の下に趨くの勇氣なく、何時迄も、何處迄も、門外漢として立ち、所謂る方外の友人として、老漢に接したり。然も予が交遊、概ね老漢を環りて集まり、宛も老漢が、其の環を貫く、線紐たる觀あるに於ては、予は老漢に對して、更らに一層の懇欵の情を傾けざらんとするも、能はざりし也。

三重の因緣

要するに予は個人の關係に於て、老漢を見、父母及び家族の關係に於て、老漢

を見、交遊の關係に於て、老漢を見る。卽ち予と老漢とは、三重の因緣ありと謂ふ可き歟。

國家問題に共鳴

更らに予をして、老漢に傾倒せしめたる所以のものあり。そは國家問題に於て、互ひに共鳴する所多かりしを以て也。老漢は禪僧なれども、何よりも先づ日本人なりき。老漢は國體論に於て、思想問題に於て、帝國經綸の根本義に於て、殆んど吾人と其の立場を偕にしたり。彼は單に吾人の意見を諒會したるのみならず、老漢自己の意見も、概して復た此の如くにてありき。予は不肖にして、

此の老記者を理解

唯心宗の大宗師としての老漢を、理解する能はざりしも、老漢は此の江湖逸民の老新聞記者をば、十の八九迄理解したりしが如し。而して此の帝國經綸の根本義に於ては、現時は勿論、相與に一生を通じて、提携するを以て、相互の大

禪僧以外

なる愉快と信じたりしが如し。

此の如く予は自から參禪の徒たらざるも、老漢と交るには、何等の支障を見ざりし也。何となれば老漢は、禪僧以外に、否な以上に、幾許の方面あり幾許の興

幾許の抱負希望

趣あり、幾許の抱負、希望ありたれば也。而して約して之を云へば、老漢は此の現代の社會を救濟し、人心を指導するは、禪僧の本分以外の事にあらずして、是卽ち其の本分としたれば也。

敬服すべき種々相

予は禪學に於て、門外漢なれば、此の方面に於ける老漢に就ては、姑らく緘默す可し。但だ個人として老漢を見れば、敬服す可き點頗る多かりき。老漢は一腔進取の氣を以て充溢せり。老漢は進歩の味方たるのみならず、其人自身が、進歩の本體たりし也。老漢は活動の權化にして、寸時も逸遊する能はざりし也。若し强ひて其の缺點を云へば、寧ろ餘りに新に趁りしにあり、寧ろ餘りに動的たりしにあり。而して更らに敬服す可きは、利慾、權勢の外に脫然、超然たりしにあり。

世間的の

凡そ老漢の如く、其の興趣の世間的の事に饒多にして、其の心事の出世間的な

興趣と出世間的の心事

るものは、天下今古、絶無と云はざるも、僅有の例と云はざるを得ず。其の世俗なるは、世俗に偏在し、其の高蹈なるは、高蹈に偏在す。天下俗僧尤も多く、高僧亦た時として少からず。されど老漢の如きは、其の貌俗にして、其心は高。其手は世間に働いて、其魂は天上にあり。若し老漢にして、今少しく名利の念あらしめば、彼は之を得るに於て、必らず其の方便多かりしならむ。

自己の所信に突進

されど一言にして云へば、彼は其の俊敏、鋭利なる理智、才覺の閃めきに似ず、寧ろ世渡りに拙なりしが如し。否な僧侶としてさへも、彼は大なる行政的手腕ある、大なる組織者にあらず。又た大なる企謀ある、大なる野心家にあらず。唯だ自己の所信に向つて、突進する以外は、一切を行雲流水に任せ去りたりしに似たり。

第三者に對する態度

殊に敬服す可きは、老漢未だ曾て第三者に對して、他の長短を謂はざりし事也。凡そ宗教家は、淡泊なる可き筈なれども、其の狹隘なる寰内に割據する結果は、緇衣を纏うたる、御殿女中たるの看あるもの少なからず。但だ老漢には、其の表面覇氣滿々たりしに拘らず、何等者般の蟠まりを見ざりし也。若し其の缺點を云へば、寧ろ莫迦正直とも云ふ可かりしが如し。惟ふに老漢の會下、桃李門に滿つ。然も是れ自然に吸引し來りたるものにして、毫も其の門戸を張大にし、勢寰を擴充せんが爲めに、故らに其力を、此に竭したるにあらず。彼には宣傳者たる氣分は、有り餘る程なりしも、政治家たる氣分は、殆んど見出さゞりさ。而して予が老漢に多しとしたるは、却て之れ無きが爲めのみ。

宣傳者たるの氣分

徹上徹下非僞善者

老漢の少壯時代は、頗る不羈放縱を以て、僧俗兩間に鳴れり。然も吾人の聞く所によれば、彼の慶應義塾にありて、人に知らるゝを好まざる場所に、出入するに際しても、依然緇衣を脫せざりしと云ふ。彼は徹上徹下、僞善者たる資格あらざりしが如し。晩年痛く自から戒飭したるも、尙ほ稠人廣座の中にて、其興に食する者と、同一の食料を攝りて平然たりし也。卽ち人前に素を喫し、密

室に肉を喫するが如きは、彼の自から屑とせざる所たりし也。

寔事是求的の活動家

但だ不思議なるは、老漢には、何等月並的禪僧らしき習氣、態度あらざりし事是れのみ。否な瀟脫とか、超逸とか、曠達とか、あらゆる禪僧的性格は、殆んど皆無に似たり。彼の壯時は、一休に類したる生活ありしに拘らず、自から天下の老和尙を以て任じたる、乾坤を高步したる一休の氣分は、遂に其の微痕だもあらざりき。彼は只だ眞面目腐りたる常識屋にして、大笑一聲、俗物を笑殺する機鋒の如きは、一も現す所あらざりき。滑稽の趣味なく、飄蕩の性調なく、一言にして云へば、寧ろ殺風景の、寔事是求的の活動家たりしのみ。未だ知らず、彼の六十年の生涯に、果して幾許の逸事、奇聞ありし乎、否乎。然も彼の彼たる所以は、却て此中に在るを知らざる可からず。

世界の大勢を通覽

老漢は學問を以て、自から衒はず。而して學究的研精は、彼の欲する所にあらず。彼は下問を怍ぢず、何人にも知らざるを知らずとしたり。然も彼には其位置相應の學問あり、而して特に時務に注意し、能く世界の大勢を通覽したり。所謂る大德善智識、天下其人あらむ。然も天下の僧侶にして、彼が如き時代的精神を解し、世界的氣分を有するもの幾許かある。其の筆翰は年と與に愈よ進境に赴き、特に其の草書は、殆んど妙域に入らんとせり。餘事達磨を描く、亦た一種の風趣ありき。其の詩の如きも、專門家よりすれば、指摘す可き點多きは勿論なれども、志を言ふに於て、遺憾なきに庶幾かりしが如し。若夫れ其の音吐の高朗、透徹は、天與の賜にして、老漢の諷經、提唱、演說、講話、此れが爲めに出色の特調を帶ばしめたり。而して晚年に至りて、其の講演の如きも、頗る老熟したるが如し。

草書達磨漢詩而して講演

老ゆるを欲せず

老漢は自から老ゆるを欲せず、故に人の年齡を問ふ每に、笑つて答へず。本年の一月二日、予は家族と共に東慶寺に赴き、新正を賀し、話次老漢の年齡に及ぶ。老漢良久しうして、其の還曆に達したるを告げ、色惆悵たるものありき。蓋し

其道の爲めに竭さんとする雄心は、年と與に愈よ熾盛なりしを以て也。

予が病中の慰藉

今春予が病んで築地林病院にあるや、老漢予を訪ひ、慰藉する所ありき。今夏再び入院するや、亦た然りし也。春夏の交、湯河原にあるや、予は老漢の來遊を促せり、然も老漢は其の前約多きが爲めに、果し難きを謝しぬ。而して更らに東慶寺より、野田大塊、明石柏蔭、高橋是清、阿部無佛等と葉書に連署し、

思ひ出の葉書

老漢其上に俳句を題して、之を貽れり。今や此の葉書も、思出の種子となりぬ。今秋予の老龍庵に於て、痾を養ふや、老漢既に自から病に臥したるに拘らず、

老漢と誠拙和尚の國師號

尙ほ專价を馳て、予に貽る所ありき。予は今春に於て、殆んど一死を分とせり。然るに思ひきや、予を慰藉したる老漢は死し、予は却て老漢を弔ふの文を艸せんとは。人間萬事、寸前暗黑、眞に思議す可からざるものあり。

但だ最近老漢の念頭に横りたる、誠拙和尚の國師號、宣下の吉報に接し、永眠に就きたるは、せめてもの仕合と云ふ可き歟。去月大谷光瑞師の吾廬を訪ふや、

老漢と今後の十年

相携へて杜戸明神に遊び、其の境内を彷徨す。師宗演老漢の病狀を問ふや、予答ふるに實を以てし、與に共に嗟嘆したり。若し老漢にして、今後十年を長からしめば、其の德は齡と與に躋り、玆に智德圓滿、東洋一個の大老僧を打出したらんに、天年を假さず。是れ單に彼一人の不幸ならず、禪宗一派の不幸ならず、實に天下の不幸と云はざるを得ず。而して予は國家の爲めに、有用の人物を失うたるを、痛悼すると同時に、予が心契の一友を喪うたるを、深惜せざるを得ず。嗚呼哀哉。（大正八年十一月二日午前八時　觀瀾亭に於て）

石井十次君

苦戰惡鬪の餘永眠

石井十次君、病を抱いて、日向茶臼原孤兒院に苦戰惡鬪の餘、遂に逝けり。日本は是に於て、確かに一人の人物を少くしたり。多くの孤兒は、爲めに其の慈

親を失へり、而して記者の如きも、亦た其の双心相許す親友の一を亡へり。記者豈に此際に於て、沈默して已む可けん哉。

君に就て見る所を

岡山孤兒院の創立者として、經營者として、若しくは帝國に於ける慈善事業の急先鋒として、或は一個の熱信なる基督教徒として、君を語るには、他に其人ある可し。記者は君の事功を頌讃せんとするにあらず、又た君の信仰の歷史を追錄せんとするにあらず。唯だ君に就て、自ら見る所を、聊か語らんとするのみ。何となれば君は、何物としてよりも、先づ人として、最も其の特性を發揮したれば也。

天性的の慈善嗜好

彼は先天的に、與へんが爲めに、生活したるものにして、取らんが爲めに生活したるものにあらず。彼は本來無一物也、學識あるにあらず、富あるにあらず、而して又た非凡なる經營的手腕あるにあらず。されど彼の胸中には、與へんと欲するの念恒に燃え居れり。他人にありては、慈善は、一の克己なれども、彼にありては、一の嗜慾たり。或者は煙草を嗜み、或者は酒を嗜み、或者は書畫、骨董を嗜みたるが如く、彼は慈善を嗜みたり。學んで而して後然るにあらず、自ら矯飭して、而して後然るにあらず、天性此の如きのみ。是れ實に君が及ぶ可からざる天成の好男子たる所以也。

言行一致直情徑行の快男兒

人或は言行一致を以て、難しと爲す。されど彼は言行一致のみならず、彼の心は卽ち彼の行爲たり、彼の感覺は卽ち彼の活動たり。彼は自から思ふ所を行ふのみならず、直ちに行はずんば、自から安んぜざる性格を有す。されば協同の事業者としては、餘りに專制的也。成功ある企業者としては、餘りに突飛的也。始終一貫の大業を完成するには、恒心あるに拘らず、恒經綸を少くの憾なしとせず。されど彼の一種眞率、大膽、唐突にして、直情徑行の快男兒たるは、職として此に基因せずんばあらず。

兩個性質

此の如く一個の石井十次は、一面には己を棄てゝ他に殉する精神と。他方には

交互錯綜の生涯

己の所信を擧げて、無遠慮、無頓著に施行するのみならず、之を推して他に及ぼさずんば息まざる精神とを、經緯として出で來れり。彼の五十年の生涯は、此の兩個の性質の交互錯綜したるものにして。彼が路傍に彷徨する貧兒を見て、其の心を動かすを禁ずる能はざる眼底の涙も。彼が一世を無視し、周圍を無視し、時としては自己をも無視し、傍若無人に、其の所信に由りて振舞ふ、鐵の如き意志も。畢竟如上の二性質の化合によりて、彼が如き一種の人格を打出したるが如し。

樂天進取と膨脹的精神

更に彼に於て見出すは、樂天的、進取的、膨脹的精神也。凡そ世の慈善家なるものは、動もすれば老婆的行徑に陷り易し。唯だ彼は然らず、如何なる場合にも、奮鬪的、力行的にして、彼は恰も勇將の其の士卒を導くが如く、其の部下を導けり。彼は死に瀕しても、其眼は黃泉に向はずして、上天を指せり。記者は彼の手筆にかゝる最後の書翰を受取りて、如何に彼が勇將の凱旋するが如くして、其の死に刻々近づきつゝあるかを知れり。記者が其の全文を掲載するに遲疑するは、彼が記者に對して、餘りに深厚なる同情の文句あるを以て也。彼は自己の死を忘れて、却て他に同情するを禁ずる能はざる好漢也。但だ其の追伸の一節に曰く、

滿腹主義を實行

本年茶臼原は籾千七百俵、ザツマイモ二萬貫位の收穫有之、私が半死半生の中にも、皆々滿腹主義を實行仕居候間、御安心被下度願上候。

蓋し滿腹主義は、彼が孤兒養育の第一義也。彼は恐らくは總ての方面に向つても、之を適用したるならむ。彼が慈善事業に於ける、卓然たる異彩を放ちたる所以も、亦た恐らくは此に基因せん歟。

彼と政治的思想

彼は多きに過ぎる程、政治の思想を有したりき。或は議員として衆議院に列し、其の意見を陳ぜんことを欲したるの念も、或る期間には、胸中に往來したることと思はる。然も是れ一點功名の爲めにあらず、唯だ彼が意見を實行せんが爲めの

み。彼は大和民族の前途に、多大の希望を有したりき。彼が育兒に於ける滿腹主義は、取りも直さず、國家に於ける帝國主義と知る可し。記者は個人として、單に親友のみならず、又た同主義者を亡ふたるを痛嘆す。嗚呼悲夫。（大正三年二月八日）

白露石井勇君

白露君臨終前の遺志

本月八日夕、一友より電話あり、曰く石井白露逝けり、其の臨終の前に於て、君に弔辭を演ぜんことを望むの意を漏らせり。其意を遂ぐるは遺族の願也。君賴ひに之を諾せよと。予は實に夢かと疑へり、何となれば白露君が近年過勞の爲め、健康を損じたることを知れども、未だ其臥病の事をさへ聞かず、況んや其の永眠をや。予は實に君に於て、二十有五年の耐久朋を喪へり。焉んぞ慟以て哭せざるを得ん哉。

相知れるは新島先生永眠の前後

君と予とは竹馬の友にあらず、其の相識れるは、實に明治二十三年、新島先生永眠の前後にあり。當時君は同志社に學び、予は久しき以前に、同志社を去りたるも、新島先生なる一の大人は、實に自他の友誼を生じ、且つ繫ぐに餘りありし也。惟ふに君も亦た涙と與に、嚴寒に汗を揮ひ、先生の柩を、若王寺山頭に擔ぎ上げたる一人たりしならむ。

實業之日本に從事

爾來君は幾もなく東都に出で、業を慶應義塾に卒へ、讀賣新聞社に入り、操觚の業に從ひ、而して後實業之日本に入り、專ら其の力を致せり。予は此に於て、君と同窓たるのみならず、亦た同業たるの因緣を生じたり。但だ同窓としては、時を同うせず、同業としては、社を同うせず。然も兩人の意氣、聲息、恒に相通じたるものゝ如く然りしは、予に於て轉た胸中の愉悅たらずんばあらざりし也。

明治の三

君は男兒として、最も幸運の人と云ふ可し。何となれば、明治の三大人に敎を享

大人に享教

け、明治の三大學に、密接の關係を有したれば也。同志社に學ぶや、新島先生尙ほ在りし也。慶應義塾に於ては、福澤翁と相ひ見たり。早稻田には學ばざりしも、早稻田出身の高田、增田の諸君は、其の師たり、友たり、大隈伯に至りては、君が後半生に最も親炙したる一人たりし也。然も精神的に於て、新島先生に、最も負ふ所あり、經世的に於て、大隈伯に最も得る所ありしは、君の平生に徵して、之を察するに難からず。

文章の明暢と圓滿の常識

而して第三の長技

新聞記者としての君は、二個の長技を有せり。第一は其の文章の明暢、穩妥にして、然も水の物に賦して形を成すが如く、自由自在、筆端意の如くなりし事是れ也。君は鏡花水月の法を解したり。君は牛を語らんと欲して、角を說き、火を說かんと欲して、烟を語るの術を會したり。第二は圓滿なる常識と、平衡なる理解力とを有し、未だ曾て其の接觸したる人物、若しくは問題に對して、其の宜しきを失せざりしこと是れ也。而して若し第三の長技として數ふ可くんば、そは梟の如く、闇中に物を探らずして、雲雀の如く、光明を臨んで翔りたると是れ也。君は他の隱れたる惡を訐くを好まずして、恒に善を彰はすを樂みとしたり。是れ多年の操觚者として、一人の敵をも生ぜざりし所以也。

同志社校友の誇り

然も君は他人の善を彰はす事を樂みたれども、自個の善を彰はすことを欲せざりき。君は精神的に於て、新島先生の門人として、同志社校友の誇りと云はざる可からず。其の感激的血性男子として、其の胸中恒に獻身殉公の精神炎々たるに於て、其の謙虛人に接し、紳士的態度を持するに於て、其の恒に取る事よりも、與ふる事を先務としたるに於て、吾人が新島先生に就て學ぶ可き多くの美德は、之を君に見出せり。君の同志社に學ぶや、先生は一半病の爲め、一半大學運動の爲め、殆んど其席京都に暖かならざりし也。然らば則ち君が先生に親炙したる日の、寧ろ多からざりしや知る可し。尙ほ此の如きを見れば、是れ君の天稟による耶、將た修養による耶。

天稟か將た修養か

其社に忠實なるの一事

君が實業之日本社に於て、其の柱石たりし一事は、該社が君を待つに社葬を以てし、君の遺族に對して、鄭重なる贈遺をなしたるを以て、之を證す可し。然も君の該社に忠實なるの一事は、增田社長が洋行後、議員を辭して、社務に全力を竭さんとするに際し。君は豫て母校として、陰に陽に其の餘力を割きて、貢献したる、同志社政經部大學の、常務委員たりし任務の解除を、其の委員長たる予に申出でたるを以て知るを得可し。是れ君が同志社を愛する薄きにあらず、社長に對する義理として、斯く爲したるのみ。然も增田社長は、予が君の死後之を語る迄は、毫も與り知らざりしと云ふ。君が右の手に爲す所を、左の手に知らしめざりし、奥床しき性行の一斑、以て想ふ可きにあらずや。

自ら不起を覺悟

聞く所によれば、君は去る五日に修善寺溫泉より歸京し、惡寒を感じて、臥床に就き。七日朝胃潰瘍の爲め喀血し、自から不起を覺悟し、從容として、其の夫人に對する遺言を手記し、更らに夫人をして、左の如く口授して、筆記せしめたり。

遺言の手記と口授

死生命あり、死は少しも悲しむに足らず、在世四十六年、決して成功にはあらざるも、亦た大なる失敗にもあらず。死に臨んで心中少しも疚しき所なし。笑を含んで、永訣の途に上る。汝等妻及子女、吾が志を繼で、邦家の爲に努力せよ。

從容死期を待つ

と。生死大事、無常迅速の謎題を、解釋したる明僧、善智識の遺偈も、此に過ぐ可くもあらず。此の如くして徐ろに殘る隈なく後事を處理し、自から死期の來るを待てり。其の痛苦の激甚なるや、曰く靈肉分離の期、固より當さに然る可きのみと。而して左右を顧みて曰く、心臟麻痺來らんとす、請ふ告別せんと。泊然として逝く、時に八日午後二時卅五分。彼は實に丈夫の如くして生き、丈夫の如くして逝けり。嗚呼哀夫。（大正五年一月十一日）

齋藤修一郎君

——東京だより——

榮枯反照

幾回か遲疑したり、されど一言するを禁ずる能はざるは、齋藤修一郎氏の死也。明治二十年代に於ける彼を知るものは、其の四十年代に於ける、彼の落寞たる境遇と反照して、寔に情に勝へざる者あり。

才人一種の標本

若し彼を目して、明治時代の才人の全き標本と云ふ能はずんば、一種の標本たるに庶幾し。彼や武生藩の醫者の兒にして、夙に頭角を藩學に現はし。天下俊秀の府たる開成學校に於て、錚々たる秀才として指目せられ。學生の登龍門たる、官費洋行生となり。學成りて歸朝し、幾もなく井上侯の眷愛する所となり。殆んど侯の手足たり、股肱たり、腹心たりき。

威權の赫

井上侯の條約改正の失敗は、彼に取りても一大打擊たりしや論なし。されど彼は二十二年井上侯の再び起て、農商務に入るや、直ちに歐洲より召還せられて、其の祕書官たり。爾來侯の罷め去るに拘らず。彼は農商務省にあり、或時は商務局長たり、或時は次官たり。其の威權の赫灼たる、坐ろに意外の蹉跌を豫想せしめぬ。

灼と意外の蹉跌

金時計問題

果然金時計問題は出で來れり。此事たるや無邪氣なる彼よりすれば、何でもなし。請うたるにあらず、與へられたる也。然も取引所設置の勞を謝する意味に於て、與へられたる也。然も大臣の免許を得て、受取りたる也。彼に於て寸毫も疚ましき所なし。されど彼は之が爲めに、一蹶復た起つ能はざりき。豈に悲しからずや。

彼と不運

彼は爾來實業家ともなれり、新聞記者ともなれり、政黨員ともなれり。然も不運は恒に彼に附き纏へり。身世の蹉跎と與に、其の交友は秋葉の如く散じたり。只だ增加したるものは、借金のみなりき。此の如くして彼は太平洋向岸に浪遊

彼と才人の缺點

し、遂ひに志を果さず、東京に於て逝けり。

彼にして若し才人の缺點あらざりしならば、金時計問題にも、蹶かざる可く。蹶くも恢復の見込なきにあらざりしならむ。但だ彼や人生の意の如くなるを知りて、意の如くならざるを知らず。空しく彼の交友をして、特に得意なる交友をして、彼の最後に其の哀涙を掬せしめたり。

失意の原因に同情

彼や百の缺點あるも、眞に快活男兒たり。彼の失意の原因の一は、其の恩人井上侯の門下より遠ざかりたるにある可し。されど是れ決して井上侯の薄恩にあらず。惟ふに遠ざからざる可からざる曲折の存するあらむ。唯だ彼や餘りに才を恃みて、周到なる注意と、檢束なる行爲とを缺き、空しく半生の才人をして、窮途に斃れしむ。彼の友人ならざる記者さへも、尙ほ言明し易からざる同情の懷に湧くを覺ゆ。（明治四十三年五月十三日）

森槐南逝く

——東京だより——

明治詩學の大打擊

梁川星巖と春濤翁

森槐南君、終に逝く。明治詩學の爲めに、一大打擊と云はざるを得ず。惜夫。

徳川時代の詩は、梁川星巖に至りて、集めて大成したるに庶幾し。其の古體に至りては、聊か慊らざる所なきにあらざりしも、近體の律、絕に至りては、星巖の造詣は、明調を模倣したる徂徠、南郭よりも。宋詩に隨喜したる、寬齋、五山、天民の徒よりも、更らに超越したるを疑はず。而して槐南君の父、春濤翁は、實に星巖晚年の門人にして、少くとも其の神韵縹渺と、穠郁凄艶との衣鉢を襲へり。

槐南君は實に大家

槐南君は、實に家學を承け。其の清詩麗句に至りては、時に或は春濤翁に、讓りたりと云ふを得可きも。其の萬卷を驅使する排奡の力に至りては、前に古人

なく後に來者なきものゝ如し。而して古體、近體、長篇、短篇、行く所として可ならざるはなし。若し春濤翁を稱して、名家と云ふ可くんば、君は實に大家たりし也。

寧ろ詩學に敬服

然りと雖も記者の最も敬服したるは、詩其物よりも、寧ろ詩學にあり。凡そ漢詩の源流に至りて、君が如く博綜、會通して、之を腹中に消化したるもの、果して幾人かある。此の一點に至りては、君は何人を相手としても、抗顏高視するを得可かりし也。假令作詩に於て、君と對壘せんとする者あるも。詩學に於て、君と挑戰するは、恐らくは何人も、虎鬚を埒るの危險を冒すの感を免れざる可し。

詩壇の主盟後進の誘掖

されば君は明治の詩人として、時代思潮を詠ずるよりも。詩壇の主盟として、斯道の爲めに、後進を誘掖するを以て、其の天職と自覺したるが如し。乃ち我が『國民新聞』の如きも、說詩軒主の名目の下に、詩欄を擧げて、君に一任したりき。今や端なく君を喪ふ、吾社の不幸は言ふ迄もなし。實に是れ詩界の一大厄運也。

官人として一個の能吏

ミルトン曰く、詩人は其身自ら詩たらざる可からずと。されど槐南君は、其の一身に於ては、何等常人と異なる所なかりき。否な其の常識の發達と、其の處世の作用に至りては、尋常人の到底企て及ぶ可からざるものありき。乃ち詩を以て一家を作さゞるも、當代の官人として、確かに一個の能吏たるを、失はざりし也。

收穫の時期に逝去

此の如き行徑の人に向つて、半ば以上精神病者たる李白たり、杜甫たるを望むは、殆んど不可能の事たり。されど遺傳と、學問と、堅確なる意志と、勇猛なる自恃とは、他事は兎も角も、詩壇に於ては、何人も爭ふ可からざる横綱たらしめたり。今や漸く收穫の時期に近づきつゝ、齡五十に滿たずして去る。豈に恨事にあらずや。（明治四十四年三月八日）

栗原君を悼む

柱石の重なる一人

我が國民新聞は、栗原武三太君の長逝によりて、實に其の柱石の重なる一人を喪へり。君や明治二十三年、本紙創立以來恒に吾社に在り。明治四十四年三月朝鮮實業視察團の擧あるや、君專ら其事に膺り、其の任務を全うし。歸途嚴島に於て解團式を行ひ、汽車岡山市畔旭川を駛する際、過ちて三十尺の鐵橋より磧中に墜落し、遂ひに不慮の死を遂げたり。乃ち其職に殉じたりと云ふも、事實に於て過當ならずとす。

肥者と君との關係

本文の記者は、君と明治十三四年の頃より相知れり。曾て共に相愛社にありて、演說壇に立ちしことあり。曾て共に東肥新報社にありて、其業に從ひしことあり。爾來君は土佐に遊び、東京に出て、所謂る當時の志士と交遊し、頗る儕輩の推信する所となり、先進の器重する所となる。而して君が世態人情學の優等生として、卒業したるは、恐らくは此の五六年間の練習に、是れ因らずんばあらず。爾後偶ま衣食の爲めに、長野縣に官遊す、然も其志にあらず。明治二十三年、上野公園に於て、勸業大博覽會開催せらるゝや、君長野縣の事務員として抵る。恰も國民新聞創刊に際す。君欣然として、來り投じ、二十年一日の如く、遂に其身を終ふ。

君の素養と嗜好

君は熊本縣鹿本郡の人、萬延元年九月に生る。家世々農を業とす、父性質直にして義を好み、鄉閭の望となる。長兄家を守り、仲叔の二兄共に西南の役に斃れ、而して君も亦た一時拘囚せらる。君漢學の素養あり、筆札を善くす。碁を好み、酒を嗜む。然も其量に至りては、甚だ多からず。其三杯陶然、面赭し耳熟するや、快諧縱橫口を衝いて出づ。須臾にして乍ち肱を曲げて眠る。其時處の如何を問はず。

出入時なく飄忽來去

君の國民新聞社に在るや、出入時なく飄然として來り、忽焉として去る。何人も君を追跡し得る者なし。未だ曾て算盤を手にして、簿冊に對したることなく。未だ曾て原稿紙に向つて、筆を搦りたることなし。然も社中の人事、殆んど一として君の手を經ざるものなく、而して一たび君の手を經るや、其所を得ざるなし。其の不平者も、一たび君の慰撫の語を聞けば、乍ち釋然として色怡び。其の失望者も、一たび君に鼓舞せらるれば、忽ち猛然として氣奮ふ。社中會合ある毎に、

眞に我社の長城

一たび君の聲貌に接すれば、滿堂春回る。內外一切の葛藤、之を解決して、殆んど其の痕跡なからしむ。若夫れ社是を評定するに際し、未だ曾て君の參畫を經ざるものなく、而して經たるものにして、中らざるもの鮮し。社員の君を見る父兄の如く、君に信賴する師友の如き、而して吾社が君に據りて、其の長城となしたるもの、良に以ゐあり。

本文の記者の如きは、友人として相知る約三十年、同社として相交る約二十年。

兩極代表相容莫逆

其の性情、素養、趣味、嗜好、趨舍、あらゆる方面に於て、其途を殊にしたるのみならず、殆んど互ひに兩極を代表したるが如き看ありしに拘らず。相得て逆ふことなく、記者の不肖を以てせず、恒に最善の益友として、其の忠實なる援護者たるを辱くしたり。君や切々偲々の言を做さず、されど諄々として諷喩善誘し、未だ言を終らざるに、早くも吾をして豁然解悟せしむ。記者は一の事件に接する毎に、君の常識の如何に圓滿に發達したる乎。且つ其の友情の如何に濃厚なりし乎。而して平生好々先生たるが如くして、如何に其の操守の凛然たりし乎。

大勇大決

且つ外放縱頽蕩の如くして、如何に其の大勇大決の人たりし乎を、未だ曾て新たに發見したるの感を免かれずんばあらず。嗚呼君と相知る三十年、記者の凡眼未だ全く君を盡くす能はざりし也。

講和騷擾と君の決心決死

明治三十八年九月、講和問題の騷擾都下に起らんとするや、吾社は豫じめ其の危機を察し、同月四日の夜、社中相會して、議する所あり。君慷慨同人を激勵

して曰く、是れ男兒國に報ゆるの秋、奚んぞ遲疑せんと。翌五日夙とに社に抵り、社員を督して暴徒の至るを待つ。其の事の危きを見るや、親友阿部充家君と相顧みて曰く、今や吾等兩人身を致すの時到れりと、兩氏單刀驀地重圍を排して突出す。暴徒之れが爲めに離披す、而して君も亦た數瘡を被り、雪白の襯衣半ば殷紅となり、其の剩紅胴衣を染めて縞紋を爲す。君の家を出んとするや、豫じめ其の所親に諗げて曰く、吾れ生還せずと。何人も當時に於て、君が決心の此の如く壯烈なりしを測知せざりき。偶ま死後之を詳かにするを得て、同人相與に嗟嘆し、其の及ぶ可からざるに驚服したり。然も國民新聞社が、君に負ふ所は、單に是れのみならず。吾社の今日ある、實に君の力、與りて大に居る。但だ事所謂る椽の下の力持に屬し、得て詳說する能はざるを憾む。蓋し是れ君の志なれば也。

所謂椽の下の力持

善行無轍跡の典型

君恒に曰く、人の欲する所は、人の做すに任す、予は只だ他の好まざる所を爲さんと。是を以て君は日常の繩墨に屑々たらず。然も人の回避する難局に向つては、挺身之に膺り、毫も顧慮する所なし。故に人一たび窮厄に陷るや、其事の大小となく、未だ曾て君に想著せずんばあらず。君も亦た之を聞いて、欣然之を處理せずんばあらず。而して君は之が爲めに、毫も得色なし。他人に於ては、非常なる献身的行爲も、君に取りては、尋常の茶飯たりき。老子の所謂る善行無轍跡もの君に於て、其の典型を見る。

一切平等無差別

君や資性恬淡、人と爭はず、物と競はず。他に求むる甚だ寡く、自ら奉ずる甚だ薄し。名利に汲々たらず、貧賤に戚々たらず。富貴我に於て、浮雲の如きもの、古其の語を聞く、今其人を見る。人に對する一切平等、毫も差別なし。善人も惡黨も君の眼中には、濟度し得ざるものなし。但だ利巧振る者、豪傑振る者、君子振る者、其他凡そ虛飾、衒誇の徒に至りては、往々君の冷唇、熱舌の爲めに、其の假面を剝ぎ去らる。若夫れ眞率にして、其の誠を輸す者は、事の

信親する相談相手

正と權とを問はず、輕と重とを論ぜず、如何なる階級も、如何なる種屬も、君に於て、其の信親する相談相手を見出さゞるなし。而して君は終日遑々として、他の困厄を救ふ爲めに忙しく、其の重からざる財囊さへも、之れが爲めに傾け盡して、屢ば空しかりしが如し。君の一生は、他人の爲めに盡瘁して、始終したるものと云ふ可し。天下偶ま此の如き人なしとせず、但だ之を以て尋常一樣の事とし、毫も自覺心の機微に萠ざすなく、自負心の言貌に露はるゝなく。天眞爛漫、自然化成に至りては、記者の知り得たる範圍に於ては、他に其類を見ず。

君は無名の英雄

君の如きは無名の英雄たるに庶幾し。是れ記者の私論にあらず、君を知る者の公論也。嗚呼哀哉。（明治四十四年三月三十日）

草野門平君を悼む

舊友零落

舊友零落、秋風の枯葉を拂ふが如し。人生寂寥を感せざらんとするも、それ豈に得可けんや。吾社理事草野君の永眠の如き最も悼む可し、豈に啻吾社柱石の一人を少くのみと謂はん哉。

君の夙成

君は文久元年十二月七日を以て、肥後八代に生る。庭訓を承け、夙成を以て著はる。明治十年の役に際し、君僅かに十六、鄕の先輩に從ひ、與に官軍を援けて、賞を受く。十三年熊本第九銀行員となる、其志にあらざる也。十五年熊本新聞記者となり、始めて記者生活に入る。其前後或は敎育に從事し、或は政黨に奔走し、或は熊本商業會議所の役員となる。而して君が名を—事實上の關係は、其の以前よりあり—國民新聞社員に揭げたるは、實に明治二十五年十二月十九日にして、爾來二十有餘年、大正二年三月廿七日臨終に至る迄。或は編輯長となり、或は專務理事となり、或は經濟部長となり、而して最後に、特別通信局長となり、黽勉努力一日の如く、遂ひに其身を吾社に致して逝けり。嗚呼

二十有餘年在社

哀哉。

天成の新聞記者

君は或る意味に於て、天成の新聞記者たりき。何となれば勉強は、其の快樂たり、嗜好たりしを以て也。君の勉強や、已むを得ずして然るにあらず、彊めて而して後然るにあらず、自然の傾向、然らざるを得ずして然りし也。勉強と同時に、其の特色の一は、恒久持續の精神也。世に勉強家多しと雖も、動もすれば作輟恒なき者少しとせず。但だ君に於ては、孔子の所謂る有恒者にてありき。

有恒者と査覈的態度

此れと同時に君に取る可きは、其の精確を愛し、詳審を好み、面倒を厭はず、骨を惜まざる査覈的態度也。一知半解、粗枝大葉、事實の足らざる所、想像もて之を補ふが如き、世間の所謂る新聞記者氣質に至りては、單り君自ら能はざりしのみならず、斯の如き事は、何人に向つても、君が容恕する能はざりし所なりき。

記憶力と

然も之に止らざる也。君は一方には、異常なる記憶力を有し、他方には殆ど向ふ所可ならざるなき多方面の興趣を具へたりき。凡そ本朝古來の典故、輓近の法律、勅令、若しくは高官大僚の進退、或は財政經濟の問題、若しくは殖産興業の事より、延いて熟字、天仁於波の穿鑿に至る迄、一として其の心に關せざるものなし。他人の或は棋を圍み、煙を吹くの間も、君は兀々として、法令全書を披らき、統計表を按じ、宛も試驗前に於ける學生の如くありき。而して一たび目を觸るれば、概ね之を摘錄し、然らざるも之を記憶して、必らず他日の用に供したりき。予の如きは、一文を草する毎に、事實の審明、類例の詮議、若しくは文字章句の末に至る迄、君を煩はすを以て、殆んど日常の茶飯と同一視したりき。最も善き意義に於て、君は我が社中の活字引たりき。

多方面の興趣

社中の活字引

濫用せず

更らに君に多しとす可きは、新聞記者として、何人の信用をも濫用せざりし一事是れ也。苟も君に告ぐるに秘密の極印を捺したる言を以てすれば、其事が實際左程重大ならざるも、否な時としては他に之を知りつゝある人あるも、君は

必ず之を嚴守したり。如何なる新聞的大獲物も、如何なる記者的好奇心も、君が他人の信用を尊重する力には、打克つ能はざりき。是れ一面には、記者として の一の缺點たる可きに似たれども、總體の上より打算すれば、他人信用の鍵は此の如くして君の手に授けられたる也。君は此の如くして信賴す可き、且つ信賴せられたる記者なりき。先進諸公が、君を信愛したる偶然にあらず。

國民新聞と君の力

『國民新聞』の今日あるは、君の力與りて大に居る。『國民新聞』は、君に於て好個の記念碑たり。元來『國民新聞』は、青年書生の一團が、協力發展せしめたるものにして、何等組織、制度の如きものを有せざりき。但だ君が立法的能力によりて、其の機關の自然に成長したるものを、更らに安排分合して、其の職制を定め、責務を明らかにし、以て今日に及べり。此れと同時に、社長たる予の職務の一半を幇助し、凡そ訪問接待、文書往復、其他予が自ら堪へ難き煩屑の庶務に就て、恒に予の代理として、之を辯じ、毫も厭色なかりき。特に苟も機

予の職務の一半を幇助

密文書に至りては、事の公私に關するを問はず、殆んど一切君が手に委任し措置せられたれば、君は直接の社務以外に、容易ならざる勞に服したり。然も是れ君に取りては、寧ろ愉快なる勉强の一として享受したりき。君や一身以て、吾社と始終したるものと謂ふ可し。

治國平天下の志

君慧性早熟、結髮小楠横井翁の遺敎に私淑して、治國平天下の志を立て、後中江篤介氏等の自由民權說に傾むき。而して中ろ學問經驗と與に進み、皇室を中心とし、帝國憲法の大義を闡明し、風敎を敦うし、國本を培養するの道に就て、深く會心する所あり。偶ま桂公の新政黨を發起するや、秩序的進歩、君民合體の理想茲に於て實現せらる可しとなし、寢食を忘れて其事に從へり。而して積勞の致す所、單に是れが爲めと云ふ能はざるも、此れが誘因として、不起の客となりしは、乃ち其の所信に殉じたりと云ふも、決して過當にあらざる也。

桂公の新政黨に努力

資性謹厚外貌樸實

君資性謹厚、外貌樸實、一見田舍漢に似たり。其の長者に接する謙和安詳、色恭

しくして言倍〻遜る。然も資性明敏、事に於て通曉せざるなし。乃ち生面の人と雖も、君を信賴するを禁ずる能はざらしむ。若夫れ後進を誘掖するや、自ら先輩を以て居り、諄々として倦まず、然も一歩も假藉する所なし。奔競を好まず、自から沽るを欲せざるも、己を持する矜重、抱負凡ならず。其の一身一家の爲めにせずして、天下國家に致さんと欲するの志望は、年と與に愈よ旺盛なりき。

賢妻あり友弟あり

君家に賢妻あり、外に友弟あり、家門和樂。晩來其の情懷を和歌に遣る、毫も衰颯の兆なし。窃かに惟らく百歳も亦た此の如けむと。而して齡僅かに知命を過ぎ、今や猝かに不歸の客となる。天耶、命耶。嗚呼哀哉。（大正二年三月廿九日）

玉生武四郎君

今更痛嘆

大正十年十一月十五日、國民新聞社よりの電話にて、玉生武四郎君が、小田原の寓居に於て、永眠したる報を受取つた。豫期したる事ながら、今更ら痛嘆の至りである。

意を屬したる一人

君は予が四十年來接觸したる人々の中にて、新聞記者として、最も意を屬したる一人であつた。是れ必らずしも文藻の豐富と云ふでなく、頭腦の働らきが鋭敏と云ふでなく、又た眼快手利、目から鼻に脱ける、活動家と云ふが爲めでもなかつた。

新聞記者の氣分充實

玉生君其人全身が、新聞記者の氣分充實してゐた。君は何よりも當今の問題に對して、多大、親切なる興味を持つてゐた。君は同文書院出身で、且つ支那に官遊したる經歴もあり。その爲め支那問題に就ては、少くとも吾社の一大權威者であつた。而して君は所謂る支那通とは撰を殊にし、毫も囚はるゝ所がなかつた。執一の見なく、偏黨の情なく、唯だ寔事を是れ探討し、眞相を是れ追求し

史家的眼光と政治家的理解

た。而して君に最も取る可きは、其の研究的精神と、綜合大觀的識力であつた。君には史家的眼孔と、政治家的理解とがあつた。而して如何なる問題でも、大なる輪の片環として、之を取扱ふことを心得てゐた。乃ち一の破片から、陶器の全體を構出するが如きは、君の最も得意としたる所であつた。

君と支那を漫遊

以上所記によりて、如何に君が高級なる新聞記者の素質を具備したかを、知る可きであらう。予は大正六年の秋冬、君及び山崎猛君と共に、朝鮮、滿洲、支那南北を遊歷し、頗る得る所あつた。而して其の君に負ふ所の少からざりし事は、拙著『支那漫遊記』に掲げた通りである。

健康恢復と支那再遊の約

爾來君病に就き、予も亦た病んだ。兩個の病客は、互ひに郵筒に虛日なく、其の健康恢復の後には、支那に再遊を約した。予は西安より成都に赴き、三峽を下り、又た福建、廣東方面に遊ばんと欲し、君に其の遊程の作成を囑した。君は欣然予に向つて、略案を回報して曰く、御同樣旅行中、萬一の發病を慮り、荆妻も義勇兵として同行を申出でたり、先生以て如何と爲すと。予は君の意氣の尙ほ壯なるを見、其の恢復の期を祈つた。

湘南に靜養療病

大正九年の春、予が痾を湯河原に養ふや、君を熱海の醫王寺の寓に訪ひ、清談數刻にして去つた。爾來君は居を小田原に移し、其の病間に際し、國民新聞の爲めに、屢ば支那問題に就き、筆を執つた。予や賴ひに恢復したるも、君は遂ひに然らず。予は本月十二日『危篤生存中御目にかゝりたし』との電報を、受取らねばならぬ不幸に接した。此れは君が自ら口授したものと、後に君の夫人より承つた。

君を訪うて生別

乃ち十三日、吾妻と與に、君を小田原の病床に訪うた。君や半ば昏睡情態に在り、然も予等の來るを悅び、手を握りつゝ、語る所あつた。而して最後に『先生挫折してはいけませぬ』と云ひ、又た去らんとするや、『先生歸りてはいけませぬ』と云うた。然も予等は却て君の安靜を妨げんことを虞れ、暗涙を揮うて

好個の新聞記者を失ふ

辭した。予は今ま君に就て語らんと欲する所、尙ほ多くある。然も予の胸中には、好個の新聞記者を失うた嘆が、最も深くある。故に姑らく此事丈を一言して置く。（大正十年十一月十六日午前十一時　湘南野史亭に於て）

松方侯爵夫人

眠るが如き往生

大正九年九月十三日、松方侯爵夫人は、東京三田本邸に於て、例の如く早起し、朝餐を攝り、沐浴をなし、軈て眠るが如く逝かれたり。享年七十六歳。是れ實に夫人を知る者の齊しく驚愕し、共に痛嘆する所也。

五十有餘年の交誼

予が海東老公の知を忝うしてより既に三十有餘年。予が父の老公を知りたるは、更らに二十有餘年を加ふ。即ち我等父子の老公に於ける、五十有餘年の交誼を荷ふ。今や老夫人の歸幽に際し、感慨無量、自ら言ふ所を知らざらんとす。

福德の第一は賢夫人

總ての點に於て、福德圓滿なる海東老公の一生を通じ、若し其の尤を擧げば、賢夫人を得たるを以て、其の第一と爲す可きは、苟も海東老公を知る者の、悉く首肯する所也。否な賢夫人を得たるを以て、福德の第一と做すのみならず、

恐らくは松方侯爵家に聚まり來れる、多くの福德の素因、此に存したるを、識認せざらんとするも能はざる可し。要するに侯爵夫人は、松方侯爵家に於ける、福の神と云ふ可かりし也。

前世紀日本婦人の典型

記者は侯爵夫人に就て、深く知る所ありと云ふにあらず。されど苟も海東老公を知る者は、併せて其の夫人を知るを禁ずる能はざる也。夫人は卽今漸く我が社會に、其類を減少しつゝある、前世紀の日本婦人の典型に屬す。蓋し從來武士的家庭の婦人には、自ら剛健、自制、勤儉、力行、献身的なる氣質ありき。日本全國中に於て、特色ある薩摩武士の家庭に於て、最も然りし也。而して我が松方侯爵夫人は、薩摩武士的家庭の夫人として、殆んど其の善處、美處、長處を具備したるものゝ如かりき。

嫩色婉容と其の磁力引力

何者も夫人に接して、驚異の感を催ほすものはあらざりしならむ。誰の眼にも、夫人は一見尋常一樣の、舊式日本婦人の如く映じたりき。然も此と同時に、誰しも夫人を愛敬せずして止む能はざりき。夫人の人に接する、極めて眞率にして、且つ親切なりき。故らに愛恭を湛へざるも、態とらしく世辭を溢らさゞるも、其の嫩色婉容は、夫人に近邇する者をして、宛も春風の人を薰する如く、自から多大の好感を覺えしめたりき。其の初面の客たると、其の熟面の客たるとを問はず。其の偉大なる人物と、微小なる人物とを論ぜず。夫人の磁力、引力は、政治家としての海東老公に、如何ばかり貢献したるかは、吾人の想像に餘りあり。

痕跡なき政治的夫人

世上往々、政治的夫人なるものあり、然も我が松方侯爵夫人の如きは、所謂る政治的夫人の痕跡だになくして、最も政治的夫人の役目を、多く勗めたるものに似たり。是れ決して、記者一個の私論にあらじ。

兒孫の教育と夫人の內助

外に向つて此の如きのみならず、內に於ては、其の勞、其の力、更らに大なるものあり。夫人は松方侯爵家に於て、內務大臣たり、大藏大臣たり、侯爵をして